

中期計画の項目	2-(1)-①-1)	新たな知見の開拓につながる基礎的・探求的な調査研究
年度計画の項目	2-(1)-①-1)- ア	①有形文化財、伝統的建造物群に関する調査研究 1)我が国の美術を中心とする有形文化財等に関する調査研究 ア 国内外の文化財に関する様々な情報について分析し、それらの情報を文化財保護に対して活用するための調査研究を実施する。また、イギリス・セインズベリー日本芸術研究所と研究会を開催する。その他機関との連携も図りつつ、文化財情報の公開・活用のための、より望ましい手法等の研究を行う。
プロジェクト名称	文化財に関する調査研究成果および研究情報の共有に関する総合的研究	
文化財情報資料部	【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】 ○江村知子（文化財アーカイブズ研究室長）、橘川英規（研究員）、安永拓世（研究員）、米沢玲（研究員）ほか	

【年度実績と成果】

- 調査研究の成果データの国際標準化に向けての調整・公開
 - ・当研究所刊行の論文を学術機関リポジトリ (IRDB) で公開する作業を進め、『美術研究』、『無形文化遺産研究報告』、『保存科学』、各種報告書を 115 件新たに追加し合計 13 タイトル 3,631 件の論文のフルテキストを公開した。
 - ・OCLC のセントラル・インデックスに、2016（平成 27）の展覧会カタログ所載記事・論文のデータ約 2,948 件を「東京文化財研究所美術文献目録」として搭載した。
- 国内外の関連機関との連携・研究協議・成果公開
 - ・「パブリックドメイン資料の利用条件についてのシンポジウム」での発表
 - ・アメリカのGetty・リサーチ・ポータルに、当研究所刊行物及び所蔵資料のデータを追加し、合計 1,392 件のデータを公開し、研究協議を行った。
 - ・イギリス・セインズベリー日本芸術研究所と日本美術及びその研究に関する英語文献・記事情報の採録と活用についての協議を行った。また日本絵画についての講演を行った。（11 月 21 日）
 - ・京都府との共同研究：京都府所蔵昭和初期文化財調書の 20,000 点のデジタル画像のうち約 5,000 件のメタデータを作成し、データベース構築を行い、公開活用のための協議を行った。



セインズベリー日本藝術研究所での講演



セインズベリー日本芸術研究所での講演

年度計画評価	A
--------	---

【評定理由】 下記各観点から評価を行った。①適時性においては、国内外のインターネット利用者に対してオープン・アクセスによる利用拡大を行い、公開コンテンツ数をさらに拡充し、その成果を発表して反響を得た。②独創性においては、Getty研究所のポータルサイトを通じて当研究所の貴重書のデジタル画像の全文公開を行った点に高い独創性を示し得た。③発展性においては、日本美術の国際情報発信を行い、今後の展開を示し得た。④効率性においては、国内外の諸機関との連携強化により世界中の利用者に文化財研究の情報提供を効率よく行った。⑤継続性においては、1930年の開所以来の蓄積・実績に立脚しつつ、我が国における文化財情報の外部発信についてイニシアチブを取るとともに、その発信を安定・継続的に行える環境を整えた。よって所期の計画を上回り、順調かつ効率的に事業が推移していると判断した。					
観点	①適時性	②独創性	③発展性	④効率性	⑤継続性
定性評価	A	A	A	A	A
【目標値】 ア IRDBへの論文の追加(115件)(5月) イ Getty・リサーチ・ポータルへのデジタルコンテンツ搭載(756件追加、合計1392件)(9月) ウ OCLCへの「東京文化財研究所美術文献目録」情報提供(約2,948件)(2年3月) エ 江村知子「日本絵画にみる四季の表現」(11月21日、イギリス・セインズベリー日本芸術研究所) オ 橘川英規ほか「東京文化財研究所のパブリックドメイン資料-文化財を知り、守り伝えるための資料蓄積と研究支援」、パブリックドメイン資料の利用条件についてのシンポジウム(2年1月17日、東京・都市センターホテル)		【実績値・参考値】 (参考値) 調査・研究成果の公表環境の整備 1件(ア) 美術に関する情報公開 2件(イ,ウ) 学会・研究会等発表 2件(エ,オ)			定量評価 —

中期計画評価	A
--------	---

中期計画記載事項	我が国において古代から近現代までに制作された絵画・彫刻等を中心とする有形文化財、及びそれらに関連する国内外の文化財について、その文化財の制作背景等とその後の評価の変遷、今日に至るまでの保護等に関する調査研究、文献・画像資料及び文化財情報に関する調査研究とそれらの収集・整理を行い、調査研究成果を公開する。
評定理由及び今後の見通し	今中期計画に基づいて、当研究所の文化財に関する調査・研究の成果・データを国際標準に適合させ、国内外の関係機関との連携を強化し、広く文化財情報の公開と活用を推進し、国際性・新規性・卓越性の高い実績を上げることができた。元年度はオープンアクセス資料の増大で国内外の研究支援に貢献し、成果公表を行うことができ、引き続き専門性の高い研究資料コンテンツの公開・活用を推進する。

中期計画の項目	2-(1)-①-1)	新たな知見の開拓につながる基礎的・探求的な調査研究
年度計画の項目	2-(1)-①-1)-イ	①有形文化財、伝統的建造物群に関する調査研究 1)我が国の美術を中心とする有形文化財等に関する調査研究 イ 近世以前の日本を含む東アジア地域における美術作品を対象として、基礎的な調査研究及び光学調査を進め、研究の基盤となる資料情報の充実を図る。併せて、これにかかる国内外の研究交流を推進する。
プロジェクト名称	日本東洋美術史の資料学的研究	
文化財情報資料部	【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】 ○小林達朗（日本東洋美術史研究室長）、二神葉子（文化財情報研究室長）、江村知子（文化財アーカイブズ研究室長）、小野真由美（主任研究員）、城野誠治（専門職員）、津田徹英（客員研究員）ほか	
【年度実績と成果】		
○研究基盤となる資料整備		
・美術史研究のためのコンテンツ（日本美術史年記資料集成）を作成するため、平成11年以降の展覧会図録から年記のある作品の資料を順次収集して入力し、随時ウェブサイトにて公開し、公開されたものは元年度500件に達した。		
○研究交流の推進		
本プロジェクトにかかる研究会を次のとおり行った。		
・津田徹英「資料紹介 東京文化財研究所架蔵 平子鐸嶺自筆ノート類について—その収載内容とノート類のもつ意義—」（5月）。また美術史学会例会において江村知子「河原の風景—ライブツィヒ民族学博物館所蔵「四条河原遊楽図屏風」について—」（10月）、小野真由美「至高の気品—土佐光起撰『本朝画法大伝』の意義、そして意図するもの—」（11月）の発表を行った。		
○作品調査の実施		
・東京国立博物館との共同研究の一環として、同館所蔵平安仏画（准胝観音像 2 作品）を対象に光学的調査を実施した。		
・30年度に引き続き、タイ・バンコクで、幕末期を中心に日本から輸出された伏彩色螺鈿の技法を用いた漆工品に関する調査を2年1月12日～18日に実施した。		



タイにおける扉部材の調査



タイにおける扉部材の調査

年度計画評価	B				
【評定理由】					
下記の各観点から評価を行った。①適時性においては、最新の研究成果を研究会、学会にて発表することができた。とくに平子鐸嶺に関する研究会では、これまで等閑視されていた早世の古美術研究者の業績を今日の研究者の視点で再認識することができた。②独創性においては、タイ・バンコクでの漆工品に関する調査で、同地で活動した近代の日本人作家の足跡を新たに確認することができた。③発展性においては、30年度につづいて東京国立博物館と共同で行っている同館所蔵の平安仏画の光学調査を実施し、技法に関する新たな知見を得ることができた。④効率性及び⑤継続性においては、年記資料集成について30年度に引き続き新たに500件を追加、ホームページ上にてデータベースの公開を行い、研究効率の増加を図ることができた。よって、順調かつ効率的に事業が推移していると判断した。					
観点	①適時性	②独創性	③発展性	④効率性	⑤継続性
定性評価	B	B	A	B	B
【目標値】		【実績値・参考値】 (参考値) 論文等5件(ア～オ)、年記資料集成追加件数500件、研究発表3件(上述「研究交流の推進」の通り)			定量評価
					—
ア水野裕史「雪村周継と臨済宗幻住派」(『美術研究』428号、9月)、pp.1-18 イ安永拓世「伝祇園南海筆「山水図巻」(東京国立博物館蔵)について」(同)、pp.19-48 ウ相澤正彦「静嘉堂文庫美術館本「春日宮曼荼羅」の画風をめぐって」(『美術研究』429号、2年1月)、pp.1-18 エ米沢玲「研究ノート 二幅の不動明王画像—禅林寺本と高貴寺本—」(『美術研究』430号、2年3月)、pp.27-40 オ山本聡美「研究資料 「妙法蓮華経変相図」(静嘉堂文庫蔵)にみる南宋時代寧波の信仰と社会」(同)、pp.49-58					

中期計画評価	B
中期計画記載事項	我が国において古代から近現代までに制作された絵画・彫刻等を中心とする有形文化財、及びそれらに関連する国内外の文化財について、その文化財の制作背景等とその後の評価の変遷、今日に至るまでの保護等に関する調査研究、文献・画像資料及び文化財情報に関する調査研究とそれらの収集・整理を行い、調査研究成果を公開する。
評定理由及び今後の見通し	今中期計画4年目にあたり、年記資料集成の作成、研究会の開催を順調に実施することができた。29年度から着手した東京国立博物館との共同研究においては主要な平安仏画について撮影を継続、またタイ・バンコクでの漆工品に関する調査では、同地で活動した近代の日本人作家について新たな知見を得た。中期計画最終年度となる2年度は、これらの成果をまとめ、報告できるようにしたい。

中期計画の項目	2-(1)-①-1)	新たな知見の開拓につながる基礎的・探求的な調査研究
年度計画の項目	2-(1)-①-1)-ウ	①有形文化財、伝統的建造物群に関する調査研究 1)我が国の美術を中心とする有形文化財等に関する調査研究 ウ 近現代美術を対象として日本における展開を軸としつつ、その方向付けに大きく関わった欧米等の動向も視野に入れて分析・考察する。併せて、作家や関係者及び美術館等の諸機関が所蔵する資料の調査を行い、得られた情報を近・現代美術研究の基礎資料として整備する。その事業のひとつとして日本美術家人名データベースの作成を進める。
プロジェクト名称	近・現代美術に関する調査研究と資料集成	
文化財情報資料部	【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】 ○塩谷純（近・現代視覚芸術研究室長）、橘川英規（研究員）、城野誠治（専門職員）、野城今日子（アソシエイトフェロー）、山梨絵美子（副所長）、三上豊、丸川雄三、田中淳、齋藤達也、田所泰（以上、客員研究員）	
【年度実績と成果】		
○画家森田恒友の書誌を作成、福島県立美術館・埼玉県立近代美術館で開催の「森田恒友展」図録（11月）に掲載した。 ○仙台北城址の「伊達政宗騎馬像」で知られる彫刻家小室達の作品・資料調査をしばたの郷土館で行い、その成果を部内研究会で口頭発表した（8月26日）。 ○彫刻家三木宗策のアトリエ及び資料調査を、郡山市立美術館の中山恵理氏他と行った。 ○近代女性画家に関する研究として、栗原玉葉筆「聴鶯図」及び石川丹麗筆「華水汲図」についての作品解説を『紫陽花』創刊号（6月）、2号（12月）に発表した。 ○美術評論家鷹見明彦の資料調査を遺族宅で行い、鷹見が撮影した画廊の展示風景写真の整理に着手した。 ○29年度に行ったカリフォルニア大学ロサンゼルス校東アジア図書館でのヨシダ・ヨシエ旧蔵資料調査に基づき、『美術研究』430号にその報告を掲載した。 ○久米美術館との共同研究として、既刊『久米桂一郎日記』中のフランス語部分の和訳を進め、また黒田清輝・久米桂一郎間で交わされた書簡を翻刻、その成果を部内研究会で口頭発表した（12月10日）。		



彫刻家小室達の資料調査
（於しばたの郷土館）



彫刻家小室達の資料調査
（於しばたの郷土館）

年度計画評価		A				
【評定理由】						
下記観点から評価を行った。①適時性においては、米国で注目を集めている日本戦後美術に関するアーカイブの現状を紹介した点が高く評価される。②独創性においては、有名な「伊達政宗騎馬像」の作者でありながら等閑視されてきた小室達の調査研究を進めた点が高く評価される。③発展性においては、鷹見明彦が遺した画廊の展示風景写真という稀少な資料に着目して整理を始めた点が高く評価される。④効率性においては、数多の文章を遺した森田恒友の書誌を作成し、研究者の便を図った点を評価した。⑤継続性においては、平成 25 年度以降続けている黒田清輝宛書簡の翻刻を元年度も精力的に進めた点が高く評価される。よって所期の計画を上回り、順調かつ効率的に事業が推移していると判断した。						
観点	①適時性	②独創性	③発展性	④効率性	⑤継続性	
定性評価	A	A	A	B	A	
【目標値】		【実績値・参考値】				定量評価
		・論文等 1 件（ア）、学会・研究発表 2 件（イウ）				—
ア 橘川英規「日本戦後美術に関する「アーカイブズ」の整理・活用のあり方—UCLA 図書館所蔵ヨシダ・ヨシエ旧蔵資料を例に」（『美術研究』430 号、2 年 3 月）、						
イ 野城今日子「彫刻家・小室達 基礎研究」（文化財情報資料部研究会、8 月 26 日）、						
ウ 塩谷純・伊藤史湖「黒田清輝・久米桂一郎の書簡を読む」（文化財情報資料部研究会、12 月 10 日）、						

中期計画評価	A
中期計画記載事項	我が国において古代から近現代までに制作された絵画・彫刻等を中心とする有形文化財、及びそれらに関連する国内外の文化財について、その文化財の制作背景等とその後の評価の変遷、今日に至るまでの保護等に関する調査研究、文献・画像資料及び文化財情報に関する調査研究とそれらの収集・整理を行い、調査研究成果を公開する。
評定理由及び今後の見通し	元年度の特筆すべき成果として、久米美術館との共同研究に大きな進展がみられたことが挙げられる。黒田清輝と久米桂一郎の間で交わされた未公開の書簡を読み解き、二人の交流の跡は勿論、資料中に登場するヨーロッパの美術家に関する情報から、中期計画に掲げた西欧の美術動向との関係をうかがうことができた。最終年度となる2年度は、それらの成果を論文発表やウェブサイト公開を通して所外の研究者も利用できるようまとめていきたい。

中期計画の項目	2-(1)-①-1)	新たな知見の開拓につながる基礎的・探求的な調査研究
年度計画の項目	2-(1)-①-1)-エ	①有形文化財、伝統的建造物群に関する調査研究 1)我が国の美術を中心とする有形文化財等に関する調査研究 エ 美術作品を中心とする有形文化財についてのより深い理解を得ることを目的として、螺鈿や漆器等を主な対象として、その表現・技術・材料について自然科学や伝統技術、また歴史学等の隣接諸分野とも連携した多角的調査研究を実施するとともに、新たな研究手法の検討・開発に取り組む。
プロジェクト名称	美術作品の様式表現・制作技術・素材に関する複合的研究と公開	
文化財情報資料部	【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】 ○小林公治（広領域研究室長）、塩谷純（部長兼近・現代視覚芸術研究室長）、二神葉子（文化財情報研究室長）、江村知子（文化財アーカイブズ研究室長）、小林達朗（日本東洋美術史研究室長）	
【年度実績と成果】		
○螺鈿及び漆器類に関わる調査研究等		
・4月16日・7月2日・9月6日、東京国立博物館にて唐代琴、南蛮漆器等の調査を東博研究員の立会いで行った。7月11日、文化庁分室にて文化財第1課工芸部門調査官立ち会いで同所蔵蒔絵棚の調査を実施した。8月14日、サントリー美術館において南蛮漆器や蒔絵棚の調査を同館学芸員立ち会いで行った。9月5日、大阪府岬町理智院、尼崎市寶樹院にてそれぞれ漆塗厨子の調査を行った。2年1月22～23日に知覧博物館ほか南薩摩地域で保存科学研究センターと琉球漆器の共同調査を行った。		
○研究成果公開		
・6月22～23日、文化財保存修復学会第41回大会（帝京大学）において、30年度より実施している個人蔵漆器の研究成果を保存科学研究センターと共同で、「琉球漆器 朱漆楼閣山水人物箔絵盆の科学的調査」としてポスター発表した。先年より調査研究を行ってきた甲賀市水口所在十字形洋剣に対する研究成果を ICOM 京都大会 ICFA 委員会（共同発表者永井晃子氏、9月3日）、第53回オープンレクチャー（11月1日）、水口町郷土史会（同月9日）にてそれぞれ講演・報告し、国内外への成果の公表に努めた。またこの成果については NHK 全国・ローカル報道、各新聞やインターネット記事配信で広く周知された。9月24日開催の第6回文化財情報資料部研究会において小林公治が「南蛮漆器成立の経緯とその年代—キリスト教聖龕を中心とする検討—」を、12月24日の第8回文化財情報資料部研究会にて林佳美氏が「日本中世のガラスを探る」と題し発表を行った。12月に韓国国立中央博物館保存科学部が刊行した『保存と復元 螺鈿漆器』に論文を寄稿した。		
○研究データの整備と公開		
・インターネット公開中の『美術研究』バックナンバー・データ検索情報を追加整備し、利用者の検索に対する便宜促進を図った。また、英文要旨の無い155号以前を対象とした検索用キーワードの抽出作業を開始した。今年度に東芝国際交流財団からの助成を受け、海外出版を念頭に置き、小山真由美著『南蛮漆器考』（2019年中央公論美術出版刊）の英訳事業を進めた。また、柳沢孝撮影スライドフィルムのデータベース化作業を継続して実施した。		



ICOM 京都大会発表風景



ICOM 京都大会発表風景

年度計画評価		A			
【評定理由】					
下記各観点から評価を行った。①適時性については、保存修復科学センターと共同で進める漆器の研究成果について学会報告できた。②独創性については、これまで注目されることのなかった甲賀市水口所在の十字型洋剣の調査成果について、ICOM 国際会議をはじめ所内外で報告・講演を行い、その公表に努めた。③発展性については、日本の螺鈿について韓国で試論を発表、螺鈿漆器をめぐる日韓共同研究への道を拓いた。④効率性については、少ない人員および時間の中でデータベースの内容充実化を行った。⑤継続性については、ネット公開されているバックナンバーデータについて、海外からの広い利用促進を念頭に置いた検索便宜の充実を図ることができた。上記によって全体として所期の計画を上回り、順調かつ効率的に事業が推移していると判断した。					
観点	①適時性	②独創性	③発展性	④効率性	⑤継続性
定性評価	A	A	A	B	A
【目標値】		【実績値・参考値】			定量評価
		・論文等 3 件（ア～ウ）、学会・研究発表等 6 件（エ～ケ）			—
ア小林公治「東アジア螺鈿史の観点から見た高麗螺鈿の成立」(『美術資料』95 号 6 月) イ小林公治「日本螺鈿史試論（日韓両国語）」(国立中央博物館『保存と復元 螺鈿漆器』12 月) ウ神谷嘉美「南蛮漆器を中心とした平蒔絵技法と材料に関する検討」(『美術研究』429 号 2 年 1 月) エ山府木碧、倉島玲央、犬塚将英、早川泰弘、小林公治「琉球漆器 朱漆楼閣山水人物箔絵盆の科学的調査」(文化財保存修復学会第 41 回大会) オ小林公治「南蛮漆器成立の経緯とその年代」(文化財情報資料部研究会、9 月) カ小林公治・永井晃子「The Minakuchi Rapier, European Sword produced in Japan」(ICOM 京都大会、9 月 4 日) キ小林公治「日本唯一の伝世洋剣、水口レイピアの調査と研究」(第 53 回オープンレクチャー、11 月 1 日) ク小林公治「水口レイピア、日本で造られたヨーロッパの剣」(水口町郷土史会創立 60 周年記念講演会、11 月 9 日)、ケ林佳美「日本中世のガラスを探る」(文化財情報資料部研究会、12 月)					

中期計画評価	A
中期計画記載事項	我が国において古代から近現代までに制作された絵画・彫刻等を中心とする有形文化財、及びそれらに関連する国内外の文化財について、その文化財の制作背景等とその後の評価の変遷、今日に至るまでの保護等に関する調査研究、文献・画像資料及び文化財情報に関する調査研究とそれらの収集・整理を行い、調査研究成果を公開する。
評定理由及び今後の見通し	元年度は、各地での漆器及び螺鈿器の調査研究を実施したほか、国内学会での成果発表や各種論文による成果の公表に加え、研究成果がマスコミ報道されることで、広く一般に周知できた。ICOM 国際会議での発表や韓国での論文掲載等、国際的な研究発表も積極的に進め、2年度以降も同様の姿勢で取り組みたい。

中期計画の項目	2-(1)-①-2)	新たな知見の開拓につながる基礎的・探求的な調査研究
年度計画の項目	2-(1)-①-2)	①有形文化財、伝統的建造物群に関する調査研究 2) 建造物及び伝統的建造物群に関する調査研究 法隆寺古材調査を中心とする古代建築の調査研究を推進する。また、近世・近代を中心とした我が国の文化財建造物の保存・修復・活用に関する基礎データの収集、未指定建造物の調査、歴史的建造物の今後の保存と復元に資するための調査・研究を行い、纏まったものより順次公表を行う。伝統的建造物群及びその保存・活用に関する調査研究を推進し、保存を行っている各自自治体等への協力を行う。
プロジェクト名称	歴史的建造物および伝統的建造物群の保存・修復・活用の実践的研究	
文化遺産部	【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】 ○島田敏男（建造物研究室長）、箱崎和久（都城発掘調査部遺構研究室長）ほか6人	

【年度実績と成果】

- ・法隆寺古材調査 成果を報告書にまとめるべく図面の作成と執筆・編集作業に入った。
- ・奈良県社寺建築悉皆調査 奈良県が行っている県内社寺の悉皆調査について、調査協力を行い、13市町村全社寺の台帳を作成した。
- ・奈良県岡寺本堂板図調査 本堂内陣壁板に描かれた建地割図の調査を行った。
- ・大和高田市十二社神社本殿調査 新発見の室町中期の本殿建築の調査を行い、報告した。
- ・舟知家の調査 吉野町に所在する舟知家の調査を行い、報告した。
- ・西トップ遺跡の建築的調査 現在修復中の西トップ遺跡について建築学的調査を行った。
- ・受託調査 以下8件の調査研究業務を受託した。
 - ・「あわの至宝」調査・発信事業における建造物の調査（徳島県）
 - ・高山市料亭すさき建造物調査（高山市）
 - ・高野町文化財保存活用地域計画調査（高野町）
 - ・重要文化財綿業会館保存活用計画調査研究業務（社団法人綿業会館）
 - ・湯浅町重要建造物調査（湯浅町）
 - ・湯浅町内歴史的建造物悉皆調査（湯浅町）
 - ・名古屋鉄道株式会社所蔵貴重図面電子化の調査研究業務（名古屋鉄道株式会社）
 - ・日南市飢肥歴史的建造物活用ガイドライン作成のための調査研究（日南市）



十二社神社 調査風景

年度計画評価	A
--------	---

【評定理由】

悉皆調査及び個別建造物調査を精力的に行った。①適時性においては今後地元が作成する文化財保存活用地域計画の基礎資料となる点、③発展性においては歴史的建造物の指定・登録の促進に大きく貢献している点、④効率性においては調査方法の提案を行っている点、⑤継続性においては必要とされる調査研究を毎年精力的におこなっている点によって、高く評価でき、順調かつ効率的に業務を推進していると判断した。

観点	①適時性	③発展性	④効率性	⑤継続性	
定性評価	A	A	A	B	

【目標値】	【実績値・参考値】	定量評価
	・編集報告書数1（ア）・論文等数：6（イ～キ） ・調査（日）回数 70日	—

ア『湯浅町重要建造物調査報告書』（12月）イ大林潤・鈴木智大「岡寺本堂内陣の建地割板図について」『仏教芸術』第三号（10月）ウ大林潤「大和高田市藤森十二社神社本殿の建築について」奈文研論叢（2年1月）エ島田敏男「舟知家住宅と金峯山寺周辺の吉野建民家」奈文研論叢（2年1月）オ大林潤「西トップ遺跡中央祠堂の建築調査」紀要2019（6月）⑤島田敏男「津山市城西伝統的建造物調査2」紀要2019（6月）カ福岡啓人「近世宿場町の伝統的町家における建築的特質」紀要2019（6月）キ鈴木智大「和歌山県湯浅町湯浅における醸造家主屋の平面形式」紀要2019（6月）

中期計画評価	A
--------	---

中期計画記載事項	建造物に関しては、古代建築の保存に資するため、法隆寺古材調査を中心とする古代建築調査を行って古代建築及びその修理過程等を明らかにする。また、近世・近代の建造物等の調査研究を行い、成果を公開する。伝統的建造物群については、その保存と活用を資するため、重要伝統的建造物群保存地区を目指している地区の調査を行い、成果を公開するとともに、各地の歴史的建造物の保存に協力する。
評定理由及び今後の見通し	古代建築の技法に関する研究は、中期計画に対し順調に進捗している。当研究所が蓄積した過去の研究成果を元にした当研究所ならではの研究である。法隆寺古材調査は膨大な作業量があるが地道に研究成果をまとめて公表していく。受託各事業は自治体や所有者の求めに応じて行っているが、いずれも文化財建造物や伝統的建造物群の保存に大きく資するものである。2年度以降も、これら調査に力を注ぎたい。

中期計画の項目	2-(1)-①-3)	新たな知見の開拓につながる基礎的・探求的な調査研究
年度計画の項目	2-(1)-①-3)	①有形文化財、伝統的建造物群に関する調査研究 3)歴史資料・書跡資料に関する調査研究 近畿を中心とする古社寺や旧家等が所蔵してきた歴史資料・書跡資料等に関して、原本調査、記録作成を悉皆的に実施するとともに、仁和寺等の資料について公表に向けて整理研究を行う。
プロジェクト名称	近畿を中心とする古社寺等所蔵の歴史資料等に関する調査研究	
文化遺産部	【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】 ○吉川聡（歴史研究室長）、橘悠太（歴史研究室アソシエイトフェロー）、山田徹（同志社大学准教授・客員研究員）、綾村宏（京都女子大学教授・客員研究員）	

【年度実績と成果】

- ・仁和寺所蔵の書跡資料の調査を実施し、御経蔵第 87 函～第 98 函聖教の調書原本校正・写真撮影を実施した。また、御経蔵第 150 函の古文書について、釈文を詳細に検討し、史料集を公刊した(ア)。
- ・唐招提寺所蔵の書跡資料の調査を実施し、掛軸・印信の整理作業や、聖教第 8 函の写真撮影等を行った。また宝蔵の鎌倉時代の木札に関する考察を公表した(イ)。
- ・興福寺所蔵の歴史資料の調査を実施し、井坊家記録の調書作成、二条家記録の写真撮影を実施した。
- ・奈良市教育委員会と連携研究の協定を結び、氷室神社宮司の大宮家所蔵文書の函文書の調書作成・写真撮影を行った。
- ・三佛寺所蔵の歴史資料を調査し、近世文書第 7 函の調書作成・經典の整理作業等を行った。また近代の行場関係史料を調査し、その成果を公表した(ウ)。
- ・薬師寺所蔵の歴史資料について、新出史料を調査し、第 26 函の写真撮影を行った。
- ・当麻寺所蔵の經典の調査を実施し、開披作業・東 6 函～10 函の調書作成を行った。
- ・法華寺所蔵の未整理の歴史資料を調査した。
- ・金峯山寺関係の個人蔵歴史資料につき第 3 函～第 5 函の調書作成・写真撮影を行った。
- ・東大寺所蔵の歴史資料の調査を、科学研究費補助金も充当して実施し、新修東大寺文書聖教第 86 函～97 函の調査データ入力、第 86 函・98 函等の写真撮影を実施した。
- ・興福寺関係の個人蔵歴史資料につき、科学研究費補助金も充当して調査を行い、古文書の写真撮影・調査データ入力作業等を行った。
- ・調査協力の依頼を受けて、石山寺文化財調査・東大寺貴重書調査・文化庁による仁和寺聖教調査に協力した。



歴史研究室での古文書調査風景

年度計画評価	A
--------	---

【評定理由】

下記各観点から評価を行った。①適時性においては、特に仁和寺調査においては、現在研究が盛んな室町時代の重要古文書を多く公表しており、適時性が高い。②独創性においては、三佛寺では近代資料を用いて中世にまで遡る状態を考察しており、独創性がある。③発展性においては、室町時代の古文書の公表は今後の研究の基礎となるものであり、発展性が高い。④効率性においては、大宮家では他機関と連携研究を結んで効率的に調査を進めている。⑤継続性においては、膨大な資料を長年にわたり中断なく調査し、全容解明に努めており、継続性に優れている。よって、順調かつ効率的に事業が推移していると判断した。

観点	①適時性	②独創性	③発展性	④効率性	⑤継続性	
定性評価	A	B	A	B	A	
【目標値】	【実績値・参考値】 ・(参考値)・刊行物数：1（ア）　　論文等数：2（イウ） ・調査資料点数：仁和寺：写真撮影 396 点　唐招提寺：写真撮影 108 点　興福寺：調書作成 119 点・写真撮影 129 点　大宮家：写真撮影 49 点　三佛寺：調書作成 173 点・写真撮影 71 点　薬師寺：写真撮影 182 点　当麻寺：調書作成 77 点　金峯山寺関係個人蔵資料：調書作成 103 点　東大寺：写真撮影 188 点　興福寺関係個人蔵資料：写真撮影 127 点					定量評価
						—
ア奈良文化財研究所編『仁和寺史料　古文書編 2』　イ吉川聡「唐招提寺宝蔵の「諸人忌日料田畠施入目録」をめぐる」『覚盛上人御忌記念　唐招提寺の伝統と戒律』　ウ吉川聡「三徳山三佛寺の近代行場絵図」『奈文研論叢 1』						

中期計画評価	A
--------	---

中期計画記載事項	我が国の歴史、文化の解明及び理解の促進等を図るため、薬師寺・仁和寺等の近畿地方を中心とした寺社の歴史資料・書跡資料等に関する調査研究を行う。
評定理由及び今後の見通し	古社寺に伝来した資料で近畿を中心に調査し、その成果を公表することを目指している。中期計画 4 年目の元年度は、仁和寺の古文書を翻刻した資料集を公刊した。目標の一つを達成したと言える。今後は、他の資料・他の寺社についても着実に調査を進めていく必要がある。

中期計画の項目	2-(1)-②-1)	新たな知見の開拓につながる基礎的・探求的な調査研究
年度計画の項目	2-(1)-②-1)	②無形文化財、無形民俗文化財等に関する調査及び研究 1) 重要無形文化財の保存・活用に関する調査研究等 無形文化財等の伝承実態に関する基礎的な調査研究及び資料の収集を行うとともに、現状記録を要する対象を精査し、記録作成を実施する。記録作成に関しては、これまで継続してきた講談等の演芸に加え、邦楽分野についても範囲を広げ実施する。 調査研究等に基づく成果の一部については、一般向けの公開講座等を通して公表する。 また、これまでに研究所で収集・保管してきた記録・資料の整理を行い、必要に応じて媒体転換等の措置を講ずる。
プロジェクト名称	無形文化財の保存・継承に関する調査研究及び無形文化遺産に関わる音声・画像・映像資料のデジタル化	
無形文化遺産部	【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】 ○前原恵美（無形文化財研究室長）、石村智（音声映像記録研究室長）、菊池理予（主任研究員）、飯島満（特任研究員） ほか	
【年度実績と成果】 ○無形文化財に関する調査研究 ・芸能分野：古典芸能に関する調査研究、文化財保存技術としての楽器製作技術（能管、楽箏、箏、尺八製作技術ほか）および材料（竹材製造技術および第一次加工技術）の調査研究 ・工芸分野：染織技術及び文化財保存技術（原材料である靱皮繊維の栽培技術や加工技術）に関する調査研究 ○現状記録を要する無形文化遺産の記録作成 ・平家（菊池雄司氏ほかによる復元曲1曲）、宮園節（宮園千鶴師ほかによる古典曲・新曲各1曲）、講談及び落語の正本芝居断（一龍斎貞水師・8席・神田松鯉師6席・林家正雀師2席）の実演記録を作成 ○研究調査に基づく成果の公表 ・第13回東京文化財研究所無形文化遺産部公開学術講座「染織技術を支える草津のわざ 青花紙—花からつくる青色—」を開催（東京文化財研究所、2年2月6日、参加者90名） ・「日本の芸能を支える技Ⅴ調べ緒 山下雄治」（東京文化財研究所、2年1月発行） ・「楽器を中心とした文化財保存技術調査報告3」（『無形文化遺産研究報告』第14号、2年3月発行） ・「邦楽調査掛による常磐津節五線譜化の考察」（『無形文化遺産研究報告』第14号、2年3月発行） ○無形文化遺産に関わるアナログ資料のデジタル化 ・音声資料：オープンリールテープに関して、民謡テープ（約80時間）のデジタル化を実施		



【公開学術講座 座談会の様子】



【公開学術講座 座談会の様子】

年度計画評価	A
--------	---

【評定理由】

下記の観点から評価を行った。①適時性については、文化財の保存技術が注目される中、技術保持者の高齢化が問題となっている伝統楽器製作技術や工芸技術、及び道具や材料の調査研究を継続的に行っている点を評価した。②独創性及び⑤継続性については、講談の長編語り物、演奏機会の少ない平家や重要無形文化財の宮園節について継続的に記録を作成し、かつこれまで作成した記録一覧の公表に着手した点を評価した。③発展性については、古典芸能に関して、一つの材料から複数ジャンルの楽器製作者、実演家を繋ぎ、材料でジャンルを横断する協力体制を整え、研究に着手した点、工芸技術（染織分野）において、これまで作品調査からは識別困難であった靱皮繊維について現地調査を通じて特徴の把握に努めている点を評価した。④効率性については、専門分野が横断する文化財保存技術の調査研究において、当研究所内の他の部・センターはもとより、これまで協力体制の築かれていなかった東京芸術大学（音楽学部）の協力を得て実施できたことを評価した。よって所期の計画を上回り、発展的成果を上げていると判断し、総合評価をAとした。

観点	①適時性	②独創性	③発展性	④効率性	⑤継続性
定性評価	A	A	A	A	A

【目標値】

・

【実績値・参考値】

・論文等発表4件（アイウエ）／学会・研究発表2件（オカ）／刊行物1件（キ）

定量評価

—

ア「楽器を中心とした文化財保存技術調査報告3」イ「邦楽調査掛による常磐津節五線譜化の考察」ウ「都道府県史から見る近世日本染色技術の伝播」（以上『無形文化遺産研究報告』第14号2年3月）エ「文化財の視点からみたトロロアオイ生産技術の現状—茨城県小美玉市の事例を通じて—」オ研究発表「もう一つの及川コレクション—及川尊雄氏収集紙媒体資料—について」（東洋音楽学会定例研究会）カ講演「芸能を支えるもう一つの技—楽器製作をめぐる—」（武蔵野大学音楽資料センター主催関連講座、武蔵野大学、7月25日）キ「日本の芸能を支える技Ⅴ調べ緒 山下雄治」（東京文化財研究所）

中期計画評価	A
--------	---

中期計画記載事項	重要無形文化財を中心とする古典芸能・伝統工芸技術及びそれらに関わる文化財保存技術について、調査研究・情報収集・記録作成に努め、その保存伝承に資する成果を公開する。
評定理由及び今後の見通し	中期計画期間4年目の元年度は、無形文化財と文化財保存技術に関する包括的な研究が深化し、周辺領域の研究者との連携を当初の計画を超えて拡充した（東京芸術大学音楽学部）。また、他機関からの依頼で研究成果を活かした講演（武蔵野大学、泉屋博古館分館）を行うなど、計画以上の成果を上げている。実演記録作成も順調に継続しているほか、これまでの記録一覧の公表を開始した。以上の理由から、計画を上回る研究業務が遂行され、今後もその展開が期待できる。

中期計画の項目	2-(1)-②-2)	新たな知見の開拓につながる基礎的・探求的な調査研究
年度計画の項目	2-(1)-②-2)	②無形文化財、無形民俗文化財等に関する調査及び研究 2)重要無形民俗文化財の保存・活用に関する調査研究等 我が国の風俗慣習、民俗芸能、民俗技術等無形の民俗文化財、及び文化財の保存技術のうち、近年の変容の著しいものを中心に、現在における伝承の実態、伝承組織、公開のあり方等を明らかにするとともに、各地の保存団体や保護行政担当者等とこれら研究成果及び問題意識の共有化を図る。特に災害下における伝承の復興や、後継者不足等により継承の危機にある伝承を重点的に調査研究の対象とする。 さらに、無形文化遺産の記録やその所在情報を継続的に収集し、その情報の整理・公開に努めるとともにネットワーク構築を図る。
プロジェクト名称	無形民俗文化財の保存・活用に関する調査研究	
無形文化遺産部	【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】 ○久保田裕道（無形民俗文化財研究室長）、石村智（音声映像記録研究室長）、今石みぎわ（主任研究員）、菊池理予（主任研究員）ほか	

【年度実績と成果】

- 無形民俗文化財に関する調査研究
 - ・風俗慣習調査：盆行事等の調査研究（奈良県十津川村等）
 - ・民俗芸能調査：民俗芸能の分類に拘わる調査研究（鹿児島県瀬戸内町ほか5県）
 - ・民俗技術調査：民具製作技術（徳島市・長野市等における箕製作技術等）、和船製作技術（岐阜県美濃市）、食の技術（徳島県那賀町等における製茶技術等）の調査研究
- 選定保存技術に関する調査研究
 - ・滋賀県教育委員会と協力し、滋賀県選定保存技術「曳山金工品修理」保持者の技術の調査・映像記録作成を実施
- 無形文化遺産アーカイブスの開発と公開
 - ・被災地における無形文化遺産調査：東日本大震災被災地の無形文化遺産に関する調査
 - ・記録保存・活用に拘わる研究（福島県浪江町、宮城県女川町等）
 - ・アーカイブスの構築：「無形文化遺産総合データベース」における情報収集・整理。映像・画像等の収集とデジタル化
- 研究集会の開催
 - ・無形民俗文化財研究協議会：第14回協議会を「無形文化遺産の新たな活用を求めて」をテーマに開催（東京文化財研究所、12月20日、参加者172人）。成果は報告書として刊行
 - ・民俗技術に関する研究会（箕の研究会）を開催（5月17・18日、9月26日、参加者各13人・12人）
 - ・日本博参画プロジェクト「東京シシマイコレクション」（日本芸術文化振興会と共催）として民俗芸能公演（5月11・12日、参加者3,300人／日本芸術文化振興会、東京国立博物館と3者共催）、及びフォーラムを開催（2年1月18日、参加者108人）



鹿児島県瀬戸内町「諸鈍シバヤ」

年度計画評価	A
--------	---

【評定理由】

下記観点から評価を行った。①適時性においては、伝承地域の過疎化や少子高齢化により継承の危機に晒されている無形民俗文化財・選定保存技術の調査は社会的ニーズが高い。また東日本大震災をはじめ多発する自然災害との関連において行っている無形文化遺産の調査・研究も、同様に社会的ニーズが高い課題として注目されており極めて適時性が高い。②独創性においては、無形民俗文化財の研究部としては国内唯一の存在であり、全国の関係者とのネットワーク構築を促進させていることは、無形民俗文化財の保護体制の整備・強化に貢献するものとして、その独創性を高く評価できる。③発展性においては、調査・研究の成果を研究集会及び下記の刊行物等によって積極的に情報発信できた。④効率性においては、無形民俗文化財及び選定保存技術に関する専門家をスタッフに擁し、各人の専門性を生かして少人数ながらも効率的に調査研究を実施できた。⑤継続性においては、無形文化遺産アーカイブスの開発と公開、映像・画像等の収集とデジタル化を引き続き継続的に実施している。よって、当初の年度計画を上回る事業実績が達成されていると判断した。

観点	①適時性	②独創性	③発展性	④効率性	⑤継続性
定性評価	A	A	A	A	B

【目標値】

【実績値・参考値】

(参考値) 論文等発表3件(アイウ)／学会・研究発表2件(エオ)／刊行物2件(カキ)

定量評価

—

ア「無形文化遺産と災害復興」『中部スラウェシ地震と文化遺産報告書』 イ「近現代における阿波の発酵茶」『阿波の発酵茶』徳島県 ウ「塩と砂糖」『日本の食文化5』吉川弘文館 エ「変容の危機にある無形の民俗文化財」京都府教育委員会シンポジウム オ「モノが語る人、自然、社会—箕をめぐる民俗学的研究」『日本民俗学会年会』カ『船大工那須清一と鵜舟を造る』キ『曳山金工品修理調査報告書』（明記のないものはいずれも東京文化財研究所）

中期計画評価	A
--------	---

中期計画記載事項	無形民俗文化財においては、全国の民俗芸能・風俗慣習・民俗技術の情報を収集記録し、その保存及び活用に貢献しうる研究成果を公開する。
評定理由及び今後の見通し	年度計画になかった日本博参画プロジェクトを実施するなど、当初計画を上回る事業達成がなされたことを高く評価した。また前中期計画において重点的に行ってきた東日本大震災の被災地における無形民俗文化財の調査・研究を継続しつつも発展させ、2年度以降も自然災害のみならず地域の過疎化や少子高齢化、環境や社会構造の変化により継承の危機にある無形文化遺産の保護・活用にも貢献することを目指す。

中期計画の項目	2-(1)-②-3)	新たな知見の開拓につながる基礎的・探求的な調査研究
年度計画の項目	2-(1)-②-3)	②無形文化財、無形民俗文化財等に関する調査及び研究 3)無形文化遺産保護に関する研究交流・情報収集等 日本と関連の深いアジア諸国等との間において研究員の交流や無形文化遺産関連調査を行う等、無形文化遺産分野における研究交流事業を実施する。ユネスコ無形文化遺産保護条約に関する調査研究を進める。
プロジェクト名称	無形文化遺産保護に関する研究交流・情報収集	
無形文化遺産部	【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】 ○山梨絵美子（部長）、石村智（音声映像記録研究室長）、宮田繁幸（客員研究員）、二神葉子（文化財情報資料部文化財情報研究室長）ほか	
【年度実績と成果】		
○韓国文化財庁国立無形遺産院との研究交流 韓国国立無形遺産院との研究交流の一環として、7月1日～19日にかけて前原恵美・無形文化財研究室長を韓国国立無形遺産院に派遣し、同院の研究員と共に無形文化遺産、特に伝統音楽の楽器製作技術の継承に関する共同調査を実施した。本調査の成果は韓国国立無形遺産院における成果発表会で発表した（7月18日）。また9月17日～10月4日にかけて、韓国国立無形遺産院の姜敬恵学芸研究士を受け入れ、民俗技術、特に伝統農耕技術に関する共同調査を静岡県静岡市井川及び宮崎県椎葉村等で実施した。その成果は成果発表会で発表された（10月4日）。		
○無形文化遺産の国際的な動向に関する調査研究 ユネスコ無形文化遺産条約第14回政府間委員会（開催国コロンビア：12月9日～14日）に2人のスタッフ（石村・二神）を派遣し、ユネスコ無形文化遺産条約に関する情報収集を行うとともに、日本国政府代表団に専門的な助言を行った。なお本調査の成果は『無形文化遺産研究報告』第14号において報告した。また無形文化遺産保護条約に関する用語集『無形文化遺産用語集』を刊行した。		
○アジア太平洋無形文化遺産研究センター（IRCI）への協力 IRCIが実施する事業への協力として、国際シンポジウム「無形文化遺産の持続可能な開発への貢献に関する複合領域的研究—教育を題材として」（於東京国立博物館：11月28日～29日）に1人のスタッフ（石村）が出席した。また当研究所との共催事業として開催された国際研究者フォーラム「無形文化遺産研究の展望—持続可能な社会にむけて」（於東京文化財研究所：12月17日～18日）の運営に全面的に協力した。		



韓国との研究交流（宮崎県）



韓国との研究交流（宮崎県）

年度計画評価		B				
【評定理由】						
下記各観点から評価を行った。①適時性においては、無形文化遺産の分野で存在感を増してきている韓国の現状を把握する上で国立無形遺産院との研究交流は時宜に適ったものといえる。②独創性においては、韓国国立無形遺産院と研究交流を行っているのは当研究所のみであることに加え、新たに用語集の刊行を通じて無形文化遺産保護条約に関する情報発信を行えたのは当研究所ならではの成果である。③発展性においては、IRCIの実施する二つの国際会議に協力したことに加え、新たに用語集の刊行を通じて国内の無形文化遺産に関連した地方公共団体等へのアウトリーチを得ることが出来た。④効率性においては、ユネスコの政府間委員会において日本国政府代表団に助言を行い当研究所の成果を効率的に活用することができた。⑤継続性においては、韓国国立無形遺産院との研究交流を順調に進め、ユネスコの政府間委員会については毎年その動向を調査していることから一定の継続性を達成している。よって順調かつ効率的に事業が推移していると判断した。						
観点	①適時性	②独創性	③発展性	④効率性	⑤継続性	
定性評価	B	A	A	B	B	
【目標値】		【実績値・参考値】				定量評価
		(参考値) 論文等発表 1 件 (ア) 学会発表 2 件 (イ) 刊行物 1 件 (ウ)				—
ア二神葉子「無形文化遺産の保護に関する第 14 回政府間委員会における議論の概要と今後の課題」(『無形文化遺産研究報告』第 14 号) イ石村智「国際研究者フォーラム 無形文化遺産研究の展望—持続可能な社会にむけて」Session 1, 2 においてチェアをつとめた ウ『無形文化遺産用語集』東京文化財研究所						

中期計画評価	B
中期計画記載事項	無形文化財、無形民俗文化財等に関する課題に取り組み、その伝承・公開に係る基盤の形成に寄与する。
評定理由及び今後の見通し	中期計画の4年目として、韓国国立無形遺産院との研究交流は順調であり、本年は第3フェーズの3年目にあたるが、今後もより発展していくことが期待され、当初の計画通りに実施することができた。ユネスコ無形文化遺産条約政府間委員会における情報収集については、毎年その動向を把握するとともに、その分析結果を毎年『無形文化遺産研究報告』にて公開していることから、2年度以降も継続的に実施していくことで、中期計画の目標を十分達成していけると考える。またIRCIの事業への協力等を通じて国際的な成果発信にもつとめていく。

中期計画の項目	2-(1)-③-1)	新たな知見の開拓につながる基礎的・探求的な調査研究
年度計画の項目	2-(1)-③-1)-ア	③記念物、文化的景観、埋蔵文化財に関する調査研究 1) 史跡・名勝の保存・活用に関する調査研究 我が国の史跡・名勝に関し、以下の調査研究を行う。 ア 遺跡等の整備に関連する国際的な動向も踏まえた資料の収集・調査・整理等を行う。また、遺跡の保存・活用に関する研究集会を開催するとともに、過年度開催した研究集会の成果の取りまとめ及び公表を行う。
プロジェクト名称	我が国の記念物に関する調査研究(遺跡等整備)	
文化遺産部	【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】 ○内田和伸（遺跡整備研究室長）、高橋知奈津（遺跡整備研究室研究員）、中島義晴（景観研究室長）	
【年度実績と成果】 『平成 30 年度奈良文化財研究所遺跡整備・活用研究集会報告書 史跡等の保存活用計画』を 2 年 3 月に刊行した。 2 年 3 月 23 日に令和元年度奈良文化財研究所遺跡整備・活用研究集会を開催した。テーマは「歴史的脈絡に因む遺跡の活用―儀式・行事の再現と地域間交流の再構築―」とした。現在、文化庁では Living History 推進事業を推進しており、これは国指定・選定文化財を対象に、史料に基づいた歴史的な出来事の再現や往時の生活を体験する展示などのプログラムを開発し、文化財に新たな価値を付与し、日本文化の魅力向上とインバウンドの促進により地域活性化の好循環の創出を図るものである。各地の遺跡では復元整備などが進み、遺跡本来の景観や空間構成を取り戻してきているが、そこでの往時の人々の活動が再現されれば、当該遺跡の歴史上での意義や場所の意味がより一層理解されることが期待できる。研究会では首里城跡、平城宮跡、斎宮跡、朝鮮通信使関係地等の先行事例の発表などを通して、史実の確認、イベントとしての内容、変容した内容、観光の影響、史実をどのように伝えているか等について、また、儀式等での再現料理「歴食」についても議論する予定であった。さらに、生産地と消費地という遺跡本来の関係性に因んだ地域間交流のあり方についても議論する予定であった。しかしながら、新型コロナウイルス関係で延期となった。 平城宮跡の活用に関する実践的研究に関しては、今後、研究所として行う平城宮跡の活用について関係者で検討を進め、基本的な方針を定めた。また、元年を記念して即位関連遺構の活用を図るために、第一次大極殿前で発見された幢旗遺構の AR 表示を行い、体験会で一般の参加者 105 人から好評を得た。東区朝堂院に表示している大嘗宮跡に関しては復元イラストを作成し、パンフレットの配布を行った。		

年度計画評価		A				
【評定理由】						
下記の各観点から評価を行った。①適時性については、元年度文化庁が進めている事業の内容と離隔する適切なタイミングであった。②史跡等の活用は昨今においては適切なテーマであった。③さらに遺跡の地域間交流でのテーマで発展性が見込める。④効率性については、悪かったことはないが、良かったと言えることもなかった。⑤継続性については、毎年その時々で必要とされる研究テーマを選んでいるが、遺跡の保存活用という点では継続性をもっている。						
観点	①適時性	②独創性	③発展性	④効率性	⑤継続性	
定性評価	A	A	A	B	B	
【目標値】		【実績値・参考値】				定量評価
		(参考値)				
		・論文等件数 4 件（内 3 件がア、イ、ウ）				
		・報告書刊行数 1 件（下記、『史跡等の保存活用計画』）				—
ア 内田和伸「史跡等の保存活用計画について」『史跡等の保存活用計画』奈良文化財研究所 pp. 1-2						
イ 内田和伸「明治前期における名所旧跡の官有地化による保存」『史跡等の保存活用計画』奈良文化財研究所 pp. 101-120						
ウ 内田和伸「史跡等の特殊な構成要素について」『史跡等の保存活用計画』奈良文化財研究所 pp. 121-130						

中期計画評価	B	
中期計画記載事項	記念物、文化的景観、埋蔵文化財に関する基礎的・体系的な調査研究として以下の課題に取り組み、記念物の保存・活用、古代国家の形成過程や社会生活等の解明、文化的景観に関する保存・活用並びに研究の進展、埋蔵文化財に関する学術研究の深化に寄与する。 1) 史跡・名勝の保存・活用に関する調査研究 記念物のうち史跡については、その保存・活用のためのマネジメントに関する調査研究を地域振興の観点に基づき国際的動向も踏まえながら進める。名勝については、近世の庭園に関する調査研究を実施し、成果を公開する。	
評定理由及び今後の見通し	30 年度の研究会の報告書では文化財保護法改正を受けて史跡等の保存活用計画の必要性が高まり、その内容について構成要素の捉え方など細かい課題についても取り上げることができ、研究を深化させることができた。元年度の研究会では文化庁の行っているリビングヒストリー推進事業を意識し、既に行われてきた同様の事例を通して、事業の進め方や留意点について知見を得る予定であった。今後も文化庁の行う事業を意識した上での研究会を開催する予定である。	

中期計画の項目	2-(1)-③-1)	新たな知見の開拓につながる基礎的・探求的な調査研究
年度計画の項目	2-(1)-③-1)-イ	③記念物、文化的景観、埋蔵文化財に関する調査研究 1) 史跡・名勝の保存・活用に関する調査研究 我が国の史跡・名勝に関し、以下の調査研究を行う。 イ 近世の庭園の歴史に関する研究集会「庭園文化の近世的展開（仮称）」を開催する。また、庭園調査を行うとともに、庭園に関する基礎資料の収集・整理を進める。
プロジェクト名称	我が国の記念物に関する調査研究(庭園)	
文化遺産部	【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】 ○内田和伸（遺跡整備研究室長）、高橋知奈津（遺跡整備研究室研究員）	

【年度実績と成果】

- ・28年度より実施の「庭園の歴史に関する研究（近世）」では、元年度は「庭園文化の近世的展開」をテーマに研究会を企画し、11月24日に開催した。庭園史・建築史・歴史の各分野の研究者6人が発表を行い、ほか参加者13人と討議を行った。年度末には研究会の報告書を刊行した。
- ・25年度より継続の奈良市教育委員会との連携研究「奈良市における庭園の悉皆的調査」では、報告書刊行に向けて、執筆・編集作業を進めることができた。
- ・森蘊旧蔵資料の整理では、30年度作成しウェブサイトで公開した目録をもとに、資料等の利用価値を高めるため、資料内容や来歴を確認する整理作業を進めた。また村岡正旧蔵資料の目録の公開に向けてデジタル化を進めた。
- ・発掘庭園データベースの更新を進め、公開準備を行った。
- ・そのほか、鳥取県文化財庭園技術者講習会をはじめ、地方公共団体等実施の文化財保存活用の取り組みに対する協力において、研究成果多く活かすことができた。



庭園の歴史に関する研究会 11月24日

年度計画評価	B
--------	---

【評定理由】

①適時性について、文化財庭園の保存活用計画の策定や整備工事等が各地で実施される中で、近世庭園史の発展に資する研究会を開催し、報告書を刊行することができたほか、昭和期の文化財庭園についての記録である森蘊旧蔵資料等の整理を進めることができた。②独創性について、分野横断的に庭園について議論できる機会がほかに無い中で、貴重な討議の場として研究会を実施することができた。③発展性について、2年度とりまとめ予定の研究論集『近世庭園の研究』の刊行に向けて、議論を進めることができた。④効率性について、近世の庭園に関する諸成果を相互に活かすことで効率よく調査研究に取り組むことができた。⑤継続性については、30年度までの成果を踏まえつつ研究会を開催し、2年度の論集刊行につなげることができた。以上から本事業は良好な成果を上げていると判断した。

観点	①適時性	②独創性	③発展性	④効率性	⑤継続性
定性評価	B	B	B	B	B

【目標値】	【実績値・参考値】 (参考値) ・論文・・・3件（ア、イ、ウ） ・研究発表等数・・・4件 ・報告書・・・1件（エ）	定量評価
		—

ア. 高橋知奈津「名勝法華寺庭園の保存活用計画」平成30年度遺跡整備活用研究集会報告書、2年3月

イ. 高橋知奈津「伯耆地方の民家の庭園」令和元年度庭園の歴史に関する研究会報告書、2年3月

ウ. 高橋知奈津「森蘊の奈文研時代」森蘊研究報告、2年3月

エ. 『庭園文化の近世的展開 令和元年度庭園の歴史に関する研究会 報告書』2年3月

中期計画評価	B
--------	---

中期計画記載事項	記念物、文化的景観、埋蔵文化財に関する基礎的・体系的な調査研究として以下の課題に取り組み、記念物の保存・活用、古代国家の形成過程や社会生活等の解明、文化的景観に関する保存・活用並びに研究の進展、埋蔵文化財に関する学術研究の深化に寄与する。 2) 古代日本の都城遺跡に関する調査研究 古代日本の都城の解明等を図るため、平城地区では平城宮跡東院地区と東大寺塔院地区の調査研究を進め、飛鳥・藤原地区では藤原宮跡大極殿院地区と飛鳥地域の寺院遺跡の調査研究を進める。
評定理由及び今後の見通し	中期計画ではこの5年間の研究テーマを近世庭園の研究としている。4年目の元年度は計画通りに「庭園文化の近世的展開」をテーマに研究会を開催し、研究の現状や課題を共有できた。2年度は4か年の研究会の最終成果として研究論集を刊行する。また、所蔵資料の整理やデータベースの更新等、庭園の歴史だけでなく、文化財庭園の保存活用に活かすことのできる基盤整備を計画的に進めることができた。以上のように、歴史研究と文化財庭園の保存活用に関する実地研究の双方から知見を得、相互に活かすことができるように、今後も調査研究を深めていく。

中期計画の項目	2-(1)-③-2)	新たな知見の開拓につながる基礎的・探求的な調査研究
年度計画の項目	2-(1)-③-2)-ア	③記念物、文化的景観、埋蔵文化財に関する調査研究 2) 古代日本の都城遺跡に関する調査研究 国家の形成過程や当時の生活実態の解明に向けて、遺跡の発掘調査、出土品・遺構等に関する調査研究及び伝統的建造物に関する基礎的調査研究を行う。 ア 古代都城の解明のため、平城宮跡第一次大極殿院地区及び東方官衙地区、平城京跡、東大寺東塔院地区、藤原宮大極殿院地区、藤原京跡、及び飛鳥地域等の発掘調査を行う。
プロジェクト名称	平城宮東方官衙地区の発掘調査	
都城発掘調査部	【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】 ○渡辺晃宏（都城発掘調査部副部長）、馬場基（同史料研究室長）、丹羽崇・岩戸晶子（同主任研究員）、前川歩（同遺構研究室研究員）、山口欧志（埋蔵文化財センター遺跡・調査技術研究室研究員）	
【年度実績と成果】 ・学術調査。主要官衙が展開する平城宮東方官衙地区の様相を明らかにするための調査。 調査面積：1200 m ² 調査期間：7月1日～12月6日 ・基本層序 表土、旧耕作土の直下が遺構面である。 ・主な検出遺構 基壇建物3棟、掘立柱建物1、柱穴列1、築地堀1条、暗渠1基、 ・主な出土遺物 須恵器・土師器、瓦、帯金具 ・調査所見 当該地区の中心となる大型の東西棟基壇建物と、それに取り付く様に東西に隣接する南北棟基壇建物を確認した。建物規模・配置、近隣の出土遺物から、実務官衙の頂点たる太政官庁（弁官曹司）の可能性が高いと考えられる。またこれに先行する南北棟掘立柱建物や、分厚い整地の様子など、多くの調査成果を得た。		
		 調査区全景（北西から）

年度計画評価		A			
【評定理由】 下記の各観点から評価を行った。①適時性においては、文化庁による平城宮跡の整備計画と呼応しつつ、調査を実施できた。②独創性においては、三次元測量（sfm）・土壌分析など当研究所のもつ多様な手法を部局を越えて結集して総合的な調査を行うことができた。③発展性においては、平城宮内最大級の基壇建物とその関連施設の様相を明らかにし、古代国家史の重要な知見を得た。⑤継続性においては、周辺の調査成果や、関連する区画施設の調査成果を十分に反映して調査を行うとともに、平城宮の造成に関する知見を蓄して将来の調査に資する情報を得た。以上より、Aと判定した。					
観点	①適時性	②独創性	③発展性	⑤継続性	
定性評価	A	A	A	A	
【目標値】		【実績値・参考値】 (参考値) ・論文等数：1件（ア） ・記者発表数1・新聞報道（9月27日：朝日新聞ほか5紙） ・現地説明会1回(9月29日）参加者892人 ・出土遺物件数等：土器22箱・瓦類約1300kg・金属製品15点			定量評価
					—
ア前川歩他「東方官衙地区の調査―第615次」『奈良文化財研究所紀要2020』2年6月刊行予定					

中期計画評価	A
中期計画記載事項	古代日本の都城の解明等を図るため、平城地区では平城宮跡東院地区と東大寺塔院地区の調査研究を進め、飛鳥・藤原地区では藤原宮跡大極殿院地区と飛鳥地域の寺院遺跡の調査研究を進める。
評定理由及び今後の見通し	古代日本都城の解明等を図るため、平城宮東方官衙地区の調査を継続的に実施している。本調査もその一環であり、とりわけ平城宮内最大級の規模の基壇建物とその関連施設の発見など、多大な研究成果を得ることができた。以上より、計画以上に順調に進捗していると判断した。今後は、今回の調査成果を反映させながら、さらに継続的に調査を進めていきたいと考えている。以上よりAと判定した。

中期計画の項目	2-(1)-③-2)	新たな知見の開拓につながる基礎的・探求的な調査研究
年度計画の項目	2-(1)-③-2)-ア	③記念物、文化的景観、埋蔵文化財に関する調査研究 2) 古代日本の都城遺跡に関する調査研究 国家の形成過程や当時の生活実態の解明に向けて、遺跡の発掘調査、出土品・遺構等に関する調査研究及び伝統的建造物に関する基礎的調査研究を行う。 ア 古代都城の解明のため、平城宮跡第一次大極殿院地区及び東方官衙地区、平城京跡、東大寺東塔院地区、藤原宮大極殿院地区、藤原京跡、及び飛鳥地域等の発掘調査を行う。
プロジェクト名称	東大寺東塔院の発掘調査	
	【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】 ○渡辺晃宏（都城発掘調査部副部長）、今井晃樹（同主任研究員）、芝康次郎（同考古第一研究室研究員）、小田裕樹（同考古第二研究室研究員）、山本祥隆（同史料研究室研究員）	

【年度実績と成果】

- 東大寺東塔院の解明のための東門・北門・西門、東面回廊・北面回廊の発掘調査（東大寺・奈良県立橿原考古学研究所との合同）。
調査面積：約 900 m² 調査期間：7 月 18 日～12 月 20 日。

- 主な検出遺構
東門・北門・西門・回廊の基壇および礎石建物、同雨落溝
- 主な出土遺物
瓦（軒瓦・鬼瓦・平瓦・丸瓦）、土師器、瓦器、鉄釘、銅製品
- 調査所見

東門・東面回廊・北面回廊では鎌倉時代再建段階と奈良時代創建段階の 2 時期の遺構を確認した。北門では鎌倉時代再建段階建物とその雨落溝及び奈良時代創建段階の雨落溝の痕跡を確認した。今回の調査により、奈良時代の門や回廊の規模が明らかになり、再建期に門・回廊・雨落溝の規模と位置を変更するなど東塔院の詳細な変遷過程が判明した。



調査区全景

年度計画評価	B
--------	---

【評定理由】

下記各観点から評価を行った。①適時性においては、整備計画・復原研究の詳細の検討に合わせて、適切な発掘調査を実施することができた。②独創性においては、sfm 技術を用いた実測など奈文研ならではの総合的な調査・研究を行うと同時に、共同で調査した橿原考古学研究所のもつノウハウも合わせて導入することで大きな成果を上げることができた。③発展性においては、東塔院回廊及び門について構造や規模の変化などを確認し、今後の調査に資する情報を得た。④効率性においては、一連の調査成果をふまえて断ち割り箇所为重点的検討を行い、効率を高めた。⑤継続性においては、30 年度までの調査成果を元に調査区を設定、調査計画を策定し、質の高い調査を実施した。以上から、B と判断した

観点	①適時性	②独創性	③発展性	④効率性	⑤継続性
定性評価	B	B	B	B	B

【目標値】	【実績値・参考値】（参考値） ・論文等数：1 件（ア） ・記者発表数・新聞報道（11 月 7 日：朝日新聞他 5 紙） ・現地説明会 1 回（11 月 10 日）参加者 850 人 ・出土遺物件数等：土器 4 箱・瓦 1795 箱・金属製品 5 箱・その他 25 箱	定量評価
		—

ア 小田裕樹ほか「東大寺東塔院の調査—第 617 次」『奈良文化財研究所紀要 2020』2 年 6 月刊行予定

中期計画評価	B
--------	---

中期計画記載事項	古代日本の都城の解明等を図るため、平城地区では平城宮跡東院地区と東大寺塔院地区の調査研究を進め、飛鳥・藤原地区では藤原宮跡大極殿院地区と飛鳥地域の寺院遺跡の調査研究を進める。
評定理由及び今後の見通し	古代日本の都城解明等のために、東大寺塔院の発掘調査を進め、その様相を明らかにする中期計画である。元年度は東塔の圍繞施設に関しての情報を得る計画であった。計画通り順調に進捗しており、奈良時代創建門・回廊と鎌倉時代再建門・回廊との違いを明確に見出したことは大きな成果である。今後は調査成果の整理等にも十分注力しつつ、調査・研究を進めていきたい。 以上より、B と判定した。

中期計画の項目	2-(1)-③-2)	新たな知見の開拓につながる基礎的・探求的な調査研究
年度計画の項目	2-(1)-③-2)-7	③記念物、文化的景観、埋蔵文化財に関する調査研究 2) 古代日本の都城遺跡に関する調査研究 国家の形成過程や当時の生活実態の解明に向けて、遺跡の発掘調査、出土品・遺構等に関する調査研究及び伝統的建造物に関する基礎的調査研究を行う。 ア 古代都城の解明のため、平城宮跡第一次大極殿院地区及び東方官衙地区、平城京跡、東大寺東塔院地区、藤原宮大極殿院地区、藤原京跡、及び飛鳥地域等の発掘調査を行う。
プロジェクト名称	平城京左京二条二坊十一坪の発掘調査(611 次)	
都城発掘調査部 (平城)	【プロジェクトスタッフ (責任者に○)】 ○渡辺晃宏(都城発掘調査部副部長)、林正憲 (同主任研究員)、浦蓉子 (同考古第一研究室研究員)	

【年度実績と成果】

- 個人所有地における資材置き場造成に伴う事前調査。
調査面積：197. 25 m² 調査期間：4 月 2 日～6 月 5 日
- 基本層序
表土・旧耕作土・床土（以上合わせて 60 cm）、奈良時代の整地土（暗褐色砂質土）、地山（黒色粘質土及び褐色砂質土）
- 主な検出遺構
礎石建物 1 棟、掘立柱建物 4 棟、掘立柱塀 1 条、溝 3 条、礫敷
- 主な出土遺物
須恵器・土師器、軒丸瓦・軒平瓦・熨斗瓦、和同開珎 1 点、桧皮など
- 調査所見
左京二条二坊十一坪の建物配置・空間利用について、重要な所見を得ることができた。また、奈良時代の間における空間利用の変化についても多くの知見を得た。出土遺物も、長屋王邸所用瓦が出土するなど、さらなる検討が必要な重要な内容を含んでおり、大きな成果を上げることができた。



調査区全景（北から）

年度計画評価		B				
【評定理由】 下記各観点から評価を行った。①適時性においては、地権者との折衝を経て発掘調査の同意を確保し、重要な地点の調査を実施することができた。③発展性においては、石敷遺構の発見による土地利用状況の判明や、詳細な時期変遷を把握し、今後の調査研究に指針となる大きな成果を上げることができた。④効率性においては、従来の調査成果を勘案して、効率的な調査を実施することができた。⑤継続性においては、隣接地の調査成果とも総することで、大規模な宅地の利用状況を明らかにすることができた。以上より、Bと判定した。						
観点	①適時性		③発展性	④効率性	⑤継続性	
定性評価	B		A	B	B	
【目標値】		【実績値・参考値】 (参考値) ・論文等数：1件（ア） ・出土遺物件数：土器7箱、軒瓦36点、和同開珎1点 ・記録等作成数：実測図25枚、デジタル写真約650枚				定量評価
						—
ア林正憲他「左京二条二坊十一坪の調査－第611次」『奈良文化財研究所紀要』2020、2年6月刊行予定						

中期計画評価	B
中期計画記載事項	古代日本の都城の解明等を図るため、平城地区では平城宮跡東院地区と東大寺塔院地区の調査研究を進め、飛鳥・藤原地区では藤原宮跡大極殿院地区と飛鳥地域の寺院遺跡の調査研究を進める。
評定理由及び今後の見通し	古代都城の解明等を図るため、平城宮・京の調査成果の蓄積を進めている。中期計画に沿って着実に研究が進んでおり、計画通り順調に進捗していると判断した。今後も適切な機会をとらえつつ、調査を進めていきたいと考えている。以上よりBと判定した。

中期計画の項目	2-(1)-③-2)	新たな知見の開拓につながる基礎的・探求的な調査研究
年度計画の項目	2-(1)-③-2)- ア	③記念物、文化的景観、埋蔵文化財に関する調査研究 2) 古代日本の都城遺跡に関する調査研究 国家の形成過程や当時の生活実態の解明に向けて、遺跡の発掘調査、出土品・遺構等に関する調査研究及び伝統的建造物に関する基礎的調査研究を行う。 ア 古代都城の解明のため、平城宮跡第一次大極殿院地区及び東方官衙地区、平城京跡、東大寺東塔院地区、藤原宮大極殿院地区、藤原京跡、及び飛鳥地域等の発掘調査を行う。
プロジェクト名称	藤原宮大極殿院地区の発掘調査	
都城発掘調査部 (飛鳥・藤原地区)	【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】 ○玉田芳英（都城発掘調査部長）、森川実、廣瀬寛（以上、主任研究員）、松永悦枝（考古第一研究室研究員）、道上祥武（考古第三研究室アソシエイトフェロー）、栗山雅夫（企画調整部写真室技術職員）ほか	
【年度実績と成果】 ○藤原宮大極殿の発掘調査（飛鳥藤原第 200 次調査）を実施した。 ・調査地：橿原市高殿町 ・調査期間：4 月 23 日 ～ 10 月 23 日 ・調査面積：1,179 ㎡ ○調査成果 ・藤原宮大極殿院東北部の内庭及び東面北回廊を調査した。その結果、東面北回廊から西にのびる新たな回廊（大極殿後方東回廊）を発見し、その全容を解明した。従来礫敷広場と考えられてきた大極殿の北方は回廊によって区画されていたことが明らかとなり、柱位置と柱間寸法の検討から、両回廊は一連の計画の下で建設されたことも判明した。また、宮造営期の運河や造営溝の付け替え状況などから、大極殿院北半部の造営過程を考えるうえで重要な所見を得ることができた。今回の調査における新たな回廊の発見と全容の解明は、藤原宮の構造のみならず、古代宮都の発展過程に関して極めて重要な新知見をもたらすと同時に、2 年度以降の継続調査につながる重要な成果を得ることができた。		



大極殿後方東回廊・東面北回廊
検出状況（西から）



大極殿後方東回廊・東面北回廊
検出状況（西から）

年度計画評価		A			
【評定理由】					
下記各観点から評価を行った。①適時性では、近年の調査成果を受けて大極殿東北部を調査し、予想外の遺構に対して適切に対応し、新たな所見を数多く得ることができたためSとした。②独創性では、これまで礫敷広場と考えられてきた大極殿後方に回廊が存在していたことと、大極殿院の造営過程について重要な知見を得たことからAとした。③発展性では、大極殿後方東回廊と北へのびる造営溝の検討から、大極殿の北方に何らかの建物が存在した可能性が生じたことと、藤原宮中枢部の構造と古代宮都の発展過程の研究に関する重要な新事実を明らかとしたためSとした。④効率性では、過去の調査成果を踏まえて適切な場所に調査区を設定し、効率的に調査を実施できたためAとした。⑤継続性では、藤原宮の様相解明のための長期的な継続調査の一環として大極殿院の調査を実施しており、今後の継続調査に資する成果を得たためAとした。					
観点	①適時性	②独創性	③発展性	④効率性	⑤継続性
定性評価	S	A	S	A	A
【目標値】		【実績値・参考値】			
		・報道発表資料：1件（ア）・現地説明会数：1件（イ） ・現地説明会来場者数：971人・論文等数：3件（ウ・エなど） ・出土遺物：軒瓦等242点、丸・平瓦332箱、土器17箱、木器・木製品2箱ほか ・記録作成数：遺構実測図59枚、写真618枚			
ア奈良文化財研究所都城発掘調査部「藤原宮大極殿院の調査（飛鳥藤原第200次調査）記者発表資料」（10月） イ奈良文化財研究所都城発掘調査部「藤原宮大極殿院の調査（飛鳥藤原第200次調査）現地説明会資料」（10月） ウ松永悦枝「藤原宮大極殿院の調査（飛鳥藤原第200次調査）」『奈文研ニュースNo.75』（12月） エ松永悦枝「藤原宮大極殿院の調査―第200次」『奈良文化財研究所紀要2020』（2年6月予定）		定量評価 —			

中期計画評価	A
中期計画記載事項	古代日本の都城の解明等を図るため、平城地区では平城宮跡東院地区と東大寺塔院地区の調査研究を進め、飛鳥・藤原地区では藤原宮跡大極殿院地区と飛鳥地域の寺院遺跡の調査研究を進める。
評定理由及び今後の見通し	4 か年目の元年度の調査では、大極殿院北半部は東面北回廊とそこから西へのびる回廊によって南北に画されていたことを明らかにした。これは藤原宮の構造について再考を促すとともに、前期難波宮からの古代宮殿の発展性をより明確にした成果といえる。また、造営溝の検討からは、その造営過程の様相も明らかになりつつある。中期計画の目標達成に向けて、予想以上の成果が上がっているため、A 評価とした。2 年度以降も発掘調査を進め、藤原宮大極殿院の構造解明を目指す。

中期計画の項目	2-(1)-③-2)	新たな知見の開拓につながる基礎的・探求的な調査研究
年度計画の項目	2-(1)-③-2)-ア	③記念物、文化的景観、埋蔵文化財に関する調査研究 2) 古代日本の都城遺跡に関する調査研究 国家の形成過程や当時の生活実態の解明に向けて、遺跡の発掘調査、出土品・遺構等に関する調査研究及び伝統的建造物に関する基礎的調査研究を行う。 ア 古代都城の解明のため、平城宮跡第一次大極殿院地区及び東方官衙地区、平城京跡、東大寺東塔院地区、藤原宮大極殿院地区、藤原京跡、及び飛鳥地域等の発掘調査を行う。
プロジェクト名称	飛鳥地域等の発掘調査	
都城発掘調査部 (飛鳥・藤原地区)	【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】 ○玉田芳英（都城発掘調査部長）、尾野善裕（考古第二研究室長）、山本崇（上席研究員）、栗山雅夫（企画調整部写真室技術職員）ほか	
【年度実績と成果】 ○大官大寺南方の発掘調査（第203次） ・調査地：明日香村奥山 ・調査期間：2年2月3日～3月16日 ・調査面積：120㎡ ○調査成果 ・調査区はこれまで調査が進んでいない大官大寺と山田道の間の土地利用の様相の解明、及び当地における藤原京の条坊施工の有無の確認を目的として設定した。その結果、東四坊間路両側溝の可能性のある南北溝2条、藤原京や大官大寺の造営などに伴う大規模な整地層を複数確認した。また、下層調査により7世紀前半代の人工的な東西溝、それに沿う堀または柵列の可能性のある柱穴を確認した。 東西溝からは土師器、須恵器、燃えさし、モモ核、ウリ種実などが出土しており、近辺に当該期の遺跡が存在している可能性が高くなった。条坊側溝の可能性のある南北溝の確認は、香具山以南の条坊施工の有無と大官大寺の占地を考えるうえで重要な成果である。 また、山田道以北にも7世紀前半代の遺跡が展開しているという大きな成果を得た。これらの成果は次年度以降の調査につながるものである。		 東西溝、柱穴列検出状況 検出状況（北東から）

年度計画評価		A				
【評定理由】 下記の各観点から評価した。①適時性においては、大官大寺南方の様相を解明するため必要な場所で調査を行ったことからBとした。②独創性においては、大官大寺南方において条坊両側溝の可能性のある南北溝や大規模な整地層を確認し、成果を上げたことからAとした。③発展性においては、大官大寺南方において②で示した遺構を確認し、2年度以降の調査につながる成果を得たことからAとした。④継続性においては、29年度から大官大寺南方において計画的、継続的に調査を進めており、今後の調査に資するデータを着実に得たことからBとした。⑤効率性においては、限られた予算の中で、予想を上回る調査成果をあげたことからAとした。						
観点	①適時性	②独創性	③発展性	④継続性	⑤効率性	
定性評価	B	A	A	B	A	
【目標値】		【実績値・参考値】				定量評価
		・論文等数：2件（ア・イ） ・出土遺物：丸・平瓦1箱、土器10箱、木器・木製品1箱ほか ・記録作成数：遺構実測図19枚、写真314枚				
ア 片山健太郎「発掘調査の概要 大官大寺南方の調査（飛鳥・藤原203次）」『奈文研ニュース』No.78(2年6月予定)						
イ 片山健太郎「大官大寺南方の調査―第203次調査の概要」『奈良文化財研究所紀要2020』(2年6月予定)						

中期計画評価	B
中期計画記載事項	古代日本の都城の解明等を図るため、平城地区では平城宮跡東院地区と東大寺塔院地区の調査研究を進め、飛鳥・藤原地区では藤原宮跡大極殿院地区と飛鳥地域の寺院遺跡の調査研究を進める。
評定理由及び今後の見通し	古代日本の都城の解明等を図るため、藤原宮跡大極殿院地区と飛鳥地域の寺院遺跡の調査研究を進めるという中期計画に対して、大官大寺南方における条坊遺構を初めて確認し、目標達成に向けて順調に成果をあげただけでなく、山田道以北において7世紀前半代の遺構を確認するなど、飛鳥地域の開発史について新たな知見を得た。今後も、適宜機会をとらえて、これまで調査の手が及んでいなかった地域の様相解明を目指した調査を進めていく予定である。

中期計画の項目	2-(1)-③-2)	新たな知見の開拓につながる基礎的・探求的な調査研究
年度計画の項目	2-(1)-③-2)-イ	③記念物、文化的景観、埋蔵文化財に関する調査研究 2) 古代日本の都城遺跡に関する調査研究 国家の形成過程や当時の生活実態の解明に向けて、遺跡の発掘調査、出土品・遺構等に関する調査研究及び伝統的建造物に関する基礎的調査研究を行う。 イ 出土遺物及び遺構に関する調査、分析、復原的研究を総合的・多角的に行い、調査研究が纏まったものより順次公表する。
プロジェクト名称	飛鳥・藤原京跡出土遺物・遺構に関する調査研究等	
都城発掘調査部 (飛鳥・藤原地区)	【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】 ○玉田芳英（部長）、尾野善裕（考古第二研究室長）、清野孝之（考古第三研究室長）、山本崇（上席研究員）、廣瀬寛、和田一之輔、森川実、石田由紀子、大林潤、鈴木智大（以上主任研究員）ほか	
【年度実績と成果】		
- 元年度の発掘調査で検出した遺構の図面・写真資料の作成・整理・分析研究とともに、出土遺物の整理・分析研究を進めた。とりわけ、藤原宮大極殿院の東北部において実施した第200次調査では、大極殿後方東回廊の発見と解明という、藤原宮の構造を明らかにする上できわめて重要な成果をあげることができた。この発見により、藤原宮と前期難波宮との構造的類似が明確化し、古代宮都の発展過程をより鮮明化できるようになったことは、学術的に大きな価値がある。これらの成果は、一般向けの現地説明会で公表した。 30年度までに実施した発掘調査の遺構図面・写真資料の再整理・再検討・分析研究とともに、出土遺物の再調査・再整理・分析研究を進めた。前方後円墳の起源に関わる弥生時代後期末の大型円形周溝墓の発見等で注目を集めていた藤原京右京九条二坊・三坊、瀬田遺跡については、発掘調査報告書を刊行した。 - 飛鳥地域関係では、石神遺跡の遺構及び出土品の整理・分析作業を重点的かつ継続的に行った。その結果、飛鳥時代の土器編年を見直す十分な量のデータを蓄積することができたため、7月に奈良文化財研究所と歴史土器研究会との共催としてシンポジウム「飛鳥時代の土器編年再考」を開催し、内外から多数の研究者の参加を得て好評裏に終了した。		
		
		第200次調査現地説明会

年度計画評価		A			
【評定理由】 評定の理由は次のとおり。①適時性は最新の調査研究成果をいち早く公表し、新知見の普及・公開に努めているためAとした。②独創性は最新のデータを駆使して飛鳥時代の土器編年を見直す研究が進展し、新知見の開拓につながったことからAとした。③発展性は第 200 次調査における重要な発見により、藤原宮中枢部の構造並びに古代宮都の発展過程が今後大きく書き換えられる可能性が生じてきたためSとした。④効率性は日常業務のなかで着実にデータの蓄積が進んでいることからBとした。継続性は計画的かつ継続的な調査研究を実施し、『藤原京右京九条二坊・三坊』を刊行できたことからAとした。					
観点	①適時性	②独創性	③発展性	④効率性	⑤継続性
定性評価	A	A	S	B	A
【目標値】		【実績値・参考値】 ・記者発表件数：2 件（ア） ・研究発表件数：9 件（イ） ・報告書、論文数等：48 件（ウ・エ）			定量評価 —
ア奈良文化財研究所都城発掘調査部「藤原宮大極殿院の調査（飛鳥藤原第 200 次調査）記者発表資料」（10 月） イ尾野善裕「飛鳥時代宮都土器編年の再編に向けて」『飛鳥時代の土器編年再考』（7 月） ウ松永悦枝「藤原宮大極殿院の調査―第 200 次」『奈良文化財研究所紀要 2020』（2 年 6 月予定） エ『藤原京右京九条二坊・三坊、瀬田遺跡発掘調査報告』（2 年 2 月）					

中期計画評価	A				
中期計画記載事項	古代日本の都城の解明等を図るため、平城地区では平城宮跡東院地区と東大寺塔院地区の調査研究を進め、飛鳥・藤原地区では藤原宮跡大極殿院地区と飛鳥地域の寺院遺跡の調査研究を進める。				
評定理由及び今後の見通し	藤原宮跡大極殿院地区と飛鳥地域の寺院遺跡の調査研究を進め、古代日本の都城の解明を図るという中期計画の目標は、第200次調査における大極殿後方東回廊の発見と解明によって、所期の目標を上回る、大きな形で達成された。また一連の整理・分析研究においても、飛鳥時代の土器に関するシンポジウムが好評を博したことなど、これまでの調査研究が次第に結実しつつある。今後も、逐次整理・検討作業を進め、成果を公表していく予定である。				

中期計画の項目	2-（1）-③ - 2)	新たな知見の開拓につながる基礎的・探求的な調査研究
年度計画の項目	2-（1）- ③- 2）-イ	③記念物、文化的景観、埋蔵文化財に関する調査研究 2) 古代日本の都城遺跡に関する調査研究 国家の形成過程や当時の生活実態の解明に向けて、遺跡の発掘調査、出土品・遺構等に関する調査研究及び伝統的建造物に関する基礎的調査研究を行う。 イ 出土遺物及び遺構に関する調査、分析、復原的研究を総合的・多角的に行い、調査研究が纏まったものより順次公表する。
プロジェクト名称	平城宮・京跡出土遺物・遺構の調査・研究	
	【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】 ○渡辺晃宏（都城発掘調査部副部長）、高妻洋成（埋蔵文化財センター長）、加藤真二（企画調整部長）ほか	
【年度実績と成果】		
(1) 元年度の発掘調査及び既往の調査による検出遺構・出土遺物の整理と研究 ・平城宮東方官衙地区の調査（平城第 615 次）、等で検出した遺構の検討、及び出土した各種遺物の洗浄・整理・実測・分析・保存処理等を実施。 ・報告書の刊行に向け、平城宮東区朝堂院地区、平城京左京三条一坊一・八坪、右京一条二坊四坪・二条二坊一坪等で出土した遺構・遺物の整理・分析を実施。 (2) 調査・研究成果の公表 ・元年度に実施した発掘調査について、『紀要 2020』（イ）にて報告。 ・30 年度以前に実施した発掘調査出土遺物の研究成果について、『紀要 2019』（ア）にて報告。 ・元年度の発掘調査の概報を作成。 ・平城宮東方官衙出土木簡洗浄作業。 ・特別展『地下の正倉院展』（10 月 12 日～11 月 24 日・於：平城宮跡資料館）を開催し、図録(ウ)を刊行するとともに、記者発表を実施した。 ・『平城宮発掘調査出土木簡概報』45（エ）を刊行。		



これまでに類例のない「戸籍」と書かれた木簡（赤外線データ・部分）



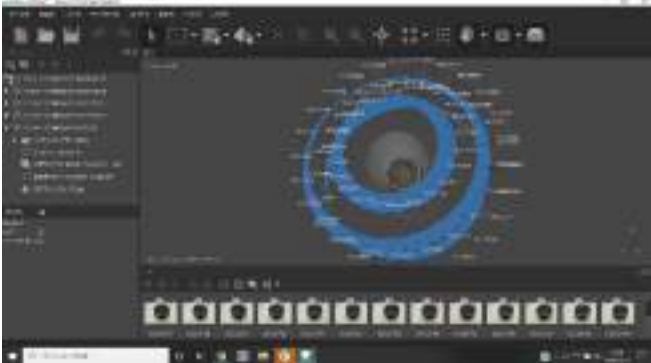
これまでに類例のない「戸籍」と書かれた木簡（赤外線データ・部分）

年度計画評価	B
--------	---

【評定理由】 下記各観点から評価を行った。①適時性においては、発掘調査の進展に対応して遺物・遺構の整理作業を進め、調査の効率的遂行や遺構の適切な理解に還元することができた。②独創性においては、科研費等の外部資金による成果と融合させながら、研究資源化（3D計測含む）まで見据えて整理作業の見直しと促進を行った。③発展性においては、平城宮東方官衙地区出土木簡の洗浄作業中に極めて特異な木簡を発見し、新たな知見を得ることができた。⑤継続性においては、これまでの調査の積み重ねを踏まえつつ、新しいデータを蓄積することができた。以上から着実に事業の成果を上げたと判断した。					
観点	①適時性	②独創性	③発展性	④効率性	⑤継続性
定性評価	B	B	B	B	B
【目標値】 【実績値・参考値】 （参考値）・報告書等の刊行数：2件（ア、イ）					定量評価
ア「Ⅲ平城宮跡等の調査概要」『奈良文化財研究所紀要2019』6月 イ「Ⅲ平城宮跡等の調査概要」『奈良文化財研究所紀要2020』2年6月刊行予定 ウ『地下の正倉院展一年号と木簡一』10月 エ『平城宮発掘調査出土木簡概報』45 2年3月					—

中期計画評価	B
--------	---

中期計画記載事項	古代日本の都城の解明等を図るため、平城地区では平城宮跡東院地区と東大寺塔院地区の調査研究を進め、飛鳥・藤原地区では藤原宮跡大極殿院地区と飛鳥地域の寺院遺跡の調査研究を進める。
評定理由及び今後の見通し	古代日本の都城解明等を図るため、遺物・遺構研究の蓄積を計画している。当初計画通りの継続的な調査・研究の蓄積を行うことができた。また、『平城宮発掘調査出土木簡概報』の刊行など、その成果の確実な公表も積み重ねている。以上から、計画以上に順調に進展していると判断した。

中期計画の項目	2-(1)-③-2)	新たな知見の開拓につながる基礎的・探求的な調査研究
年度計画の項目	2-(1)-③-2)-イ	2) 古代日本の都城遺跡に関する調査研究 国家の形成過程や当時の生活実態の解明に向けて、遺跡の発掘調査、出土品・遺構等に関する調査研究及び伝統的建造物に関する基礎的調査研究を行う。 イ 出土遺物及び遺構に関する調査、分析、復原的研究を総合的・多角的に行い、調査研究が纏まったものより順次公表する。
プロジェクト名称	3D プロジェクト	
埋蔵文化財センター	【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】 ○高妻洋成（埋蔵文化財センター長）、金田明大（遺跡・調査技術研究室長）、山口欧志（遺跡・調査技術研究室研究員）	
【年度実績と成果】		
・比較的小規模の遺物を計測するための三次元レーザースキャニング装置を新規に導入し、計測体制を整備した。 ・当研究所全所横断的に 3D プロジェクトミーティングを 3 回開催し、文化財の三次元計測とデータの活用に関する問題点の共有と改善策等について協議を重ねた。 第 1 回 奈良文化財研究所における 3 次元プロジェクトの共有 第 2 回 土器の 3 次元計測と瓦の 3 次元計測 第 3 回 3D bone atlas について		
 3 次元画像の解析と再構成作業		

年度計画評価		B				
【評定理由】 下記各観点から評価を行った。①適時性においては文化財の調査、研究、保存、活用に応用するため、種々の三次元計測に取り組んだ。②独創性においては、種々の出土遺物から遺跡、建造物に至る様々な文化財に対して、外形だけでなく、X線CT法や物理探査等多様な三次元情報を集積した。③発展性においては、文化財の三次元データを文化財の保存と活用に応用するための技術的開発に着手した。④効率性においては、当研究所の各部局における個別の取組みを全所的なものとして情報共有を行い、事業の効率性を向上させた。⑤継続性においては、当研究所が所蔵する各種遺物の目的に応じたデータ取得を行った。						
観点	①適時性	②独創性	③発展性	④効率性	⑤継続性	
定性評価	B	B	A	A	B	
【目標値】		【実績値・参考値】 (参考値) 論文等数：3件（ア、イ） 研究発表数等：12件				定量評価
						—
ア 金田明大他”Where am I in the Forest?-Application of SLAM/LiDAR Technology to Measurement and Geophysical Survey of Archaeological Sites in Forest”, Book of Abstracts 47th Computer Applications and Quantitative Methods in Archaeology 4月 イ 山口欧志「新たな可視化方法の試行：文化財の特徴を捉えるために」『文化財の壺（7）』6月22日						

中期計画評価	B	
中期計画記載事項	古代日本の都城の解明等を図るため、平城地区では平城宮跡東院地区と東大寺塔院地区の調査研究を進め、飛鳥・藤原地区では藤原宮跡大極殿院地区と飛鳥地域の寺院遺跡の調査研究を進める。	
評定理由及び今後の見通し	元年度より開始した新たなプロジェクトであるが、これまで各部局で蓄積されていたデータ及びその応用法について全所横断的に取り組むことにより文化財の三次元データに関する総合的な調査研究を推進したといえる。元年度は、全所で三次元データの取得とそのデータの取り扱いについて問題点を共有したが、今後、これらの問題点の解決と新たな解析法や活用法の開発に取り組んでいく予定である。	

中期計画の項目	2-(1)-③-2)	新たな知見の開拓につながる基礎的・探求的な調査研究
年度計画の項目	2-(1)-③-2)-ウ	③記念物、文化的景観、埋蔵文化財に関する調査研究 2) 古代日本の都城遺跡に関する調査研究 国家の形成過程や当時の生活実態の解明に向けて、遺跡の発掘調査、出土品・遺構等に関する調査研究及び伝統的建造物に関する基礎的調査研究を行う。 ウ 飛鳥時代の壁画古墳について東アジアを主とする古墳、壁画、絵画資料等の事例との比較研究を行うとともに、東アジアにおける工芸美術史・考古学研究の一環として、日韓の古代寺院出土遺物を中心とした資料の調査を行う。また、飛鳥時代木造建築遺物の研究として、藤原宮・京跡や飛鳥・藤原地域に所在する寺院の出土部材の研究を行う。
プロジェクト名称	東アジアにおける工芸技術及び飛鳥時代の建築遺物等の研究	
飛鳥資料館	【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】 ○石橋茂登（学芸室長）、西田紀子（学芸室研究員）、若杉智宏（学芸室研究員）ほか2名	
【年度実績と成果】		
・ 中国と韓国の壁画古墳に関する資料を収集し、韓国漢城百済博物館の壁画模写資料について調査した。 ・ 30年度調査の成果を論文等で発表した（ア）。 ・ 飛鳥時代寺院出土の風鐸（飛鳥寺跡・大官大寺跡）について鉛同位体比分析を実施した。成果は2年度刊行の紀要で報告する予定。 ・ 山田寺跡出土部材の計測調査を継続した。		
		
鉛同位体比分析のためのサンプリング		

年度計画評価	B				
【評定理由】 飛鳥時代寺院出土の風鐸の鉛同位体比分析は古代の金属生産の実態を解明する上で重要な調査である。これまでの鉛同位体比分析の成果ともあわせて、知見の蓄積が将来の大きな研究につながる可能性をもつ点で⑤継続性③発展性が評価できる。また分析対象の飛鳥寺跡出土品は近年の発掘調査で出土したものであり、速やかな分析は①適時性④効率性を評価できる。このほか、30年度成果の論文公表は①適時性④効率性を、飛鳥資料館が長年継続している壁画関連資料の収集は⑤継続性と館の個性を活かした②独創性を評価できる。山田寺跡出土部材の計測調査は、保存処理された大型木製品が展示環境においてどのような挙動を示すのかを知る重要な調査であり、他館にはできない点で、⑤継続性②独創性を評価できる。					
観点	①適時性	②独創性	③発展性	④効率性	⑤継続性
定性評価	B	A	B	B	B
【目標値】		【実績値・参考値】 (参考値) 論文等数 1 件 (ア)			定量評価
					—
ア 石橋茂登・降幡順子・中川あや「飛鳥寺塔心礎出土銅製品の鉛同位体比分析」『奈良文化財研究所紀要 2019』6 月刊行					

中期計画評価	B	
中期計画記載事項	古代日本の都城の解明等を図るため、平城地区では平城宮跡東院地区と東大寺塔院地区の調査研究を進め、飛鳥・藤原地区では藤原宮跡大極殿院地区と飛鳥地域の寺院遺跡の調査研究を進める。	
評定理由及び今後の見通し	調査研究を継続的に遂行しており、着実に成果を上げていると評価できる。その内容も、壁画古墳や飛鳥の古代寺院に関連しており、飛鳥資料館の調査研究としてふさわしい内容といえる。今後はさらに調査研究を継続し、新しい学術的な知見を得て効率的な成果の公表を続けていくことが期待できる。	

中期計画の項目	(1)－③－2)	新たな知見の開拓につながる基礎的・探求的な調査研究
年度計画の項目	2-(1)-③-2)-エ	③記念物、文化的景観、埋蔵文化財に関する調査研究 2) 古代日本の都城遺跡に関する調査研究 国家の形成過程や当時の生活実態の解明に向けて、遺跡の発掘調査、出土品・遺構等に関する調査研究及び伝統的建造物に関する基礎的調査研究を行う。 エ アジアにおける古代都城遺跡、生産遺跡及び陶磁器に関する調査研究並びに研究協力について、日本の古代都城及び北魏洛陽城等に関する中国社会科学院考古研究所との共同研究と学術交流の推進、中国の生産遺跡（鞏義市黄冶窯跡・白河窯跡及び生産品）に関する河南省文物考古研究院との共同研究、三燕文化出土の金属器・陶器等の調査・分析を中心とする遼寧省文物考古研究所との共同研究、日韓古代文化の形成と発展過程に関する韓国国立文化財研究所との研究者の発掘現場交流を含む共同研究等を、協定に基づいて行う。また、調査研究が纏まったものより順次公表する。
プロジェクト名称	中国との共同研究	
都城発掘調査部 （平城）	【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】 ○玉田芳英（都城発掘調査部部長）、○渡邊晃宏（都城発掘調査部副部長）、尾野善裕（同考古第二研究室長）、今井晃樹・神野恵（同上席研究員）、丹羽崇史・廣瀬寛（同主任研究員）	
【年度実績と成果】		
・中国社会科学院考古研究所：友好共同議定書に基づき、石田由紀子主任研究員を中国社会科学院考古研究所に派遣し、遺跡・遺物の調査、学術交流を実施（10月15～11月15日）。中国社会科学院考古研究所の周振宇研究員・唐錦京副研究員の2人を奈良文化財研究所に招聘し、遺跡、遺物の調査、学術交流を実施（11月1日～12月1日）。奈文研研究員3人が瓦の調査を実施（2年2月）。 ・河南省文物考古研究院：共同研究議定書に基づき、先方代表团5人を招聘（12月16日～20日）。『黄冶窯発掘調査報告書』日本語版について編集作業を進めた。 ・遼寧省文物考古研究院：友好共同研究「三燕文化出土遺物の研究」にかかる学術交流として先方代表团4人を招聘（9月6日～11日）。遼寧省文物考古研究院、錦州市博物館、朝陽市博物館を7人で訪問し、三燕文化出土の金属器・土器等を調査（11月11日～17日）。前回の共同研究成果をとりまとめた論文集『東アジア考古学論叢Ⅱ-遼西地域の東晋十六国期都城文化の研究-』（奈良文化財研究所学報第98冊）を刊行した。		



河南省調査団による講演会の様子



河南省調査団による講演会の様子

年度計画評価		B			
【評定理由】 以下の各観点から評価を行った。①適時性においては、それぞれの共同研究を予定通り実施することができた。③発展性においては、遼寧省文物考古研究院との共同研究で、前回共同研究の成果を論文集として公表し、さらなる研究の発展に資することができた。④効率性においては、事前の十分な打ち合わせ・連携によって、現地での調査・作業を効率的に進めることができた。④継続性においては、従前からの研究成果の蓄積と信頼関係をさらに積み重ね、研究を行うことができた。以上から、Bと判定した。					
観点	①適時性	②発展性	③効率性	④継続性	
定性評価	B	B	B	B	
【目標値】		【実績値・参考値】 (参考値) ・中国社会科学院考古研究所：招聘2人・派遣4人 ・河南省文物考古研究院：招聘5人 ・遼寧省文物考古研究院：招聘4人・派遣7人 ・刊行物：1冊(ア)			定量評価
					—
ア『東アジア考古学論叢Ⅱ-遼西地域の東晋十六国期都城文化の研究-』（奈良文化財研究所学報第98冊）					

中期計画評価	B
中期計画記載事項	古代日本の都城の解明等を図るため、平城地区では平城宮跡東院地区と東大寺塔院地区の調査研究を進め、飛鳥・藤原地区では藤原宮跡大極殿院地区と飛鳥地域の寺院遺跡の調査研究を進める。
評定理由及び今後の見通し	古代日本の都城の解明等を図るため、アジアにおける古代都城遺跡、生産遺跡及び陶磁器に関する調査研究並びに研究協力について、濃密な研究交流を実施しつつ着実に研究を推進し、適切な公表を行うことができた。これにより、当初計画を着実に実施した。2年度以降も、より活発な研究を展開したい。以上より、Bと判定した。

中期計画の項目	(1)－③－2)	新たな知見の開拓につながる基礎的・探求的な調査研究
年度計画の項目	2-(1)-③-2)-エ	③記念物、文化的景観、埋蔵文化財に関する調査研究 2) 古代日本の都城遺跡に関する調査研究 国家の形成過程や当時の生活実態の解明に向けて、遺跡の発掘調査、出土品・遺構等に関する調査研究及び伝統的建造物に関する基礎的調査研究を行う。 エ アジアにおける古代都城遺跡、生産遺跡及び陶磁器に関する調査研究並びに研究協力について、日本の古代都城及び北魏洛陽城等に関する中国社会科学院考古研究所との共同研究と学術交流の推進、中国の生産遺跡（鞏義市黄冶窯跡・白河窯跡及び生産品）に関する河南省文物考古研究院との共同研究、三燕文化出土の金属器・陶器等の調査・分析を中心とする遼寧省文物考古研究所との共同研究、日韓古代文化の形成と発展過程に関する韓国国立文化財研究所との研究者の発掘現場交流を含む共同研究等を、協定に基づいて行う。また、調査研究が纏まったものより順次公表する。
プロジェクト名称	韓国との共同研究	
都城発掘調査部 （平城）	【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】 ○渡邊晃宏（副所長）、玉田芳英（都城発掘調査部長）、清野孝之（同考古第三研究室長）、林正憲（同主任研究員）、松永悦枝（同考古第三研究室研究員）、庄田慎也（企画調整部国際遺跡研究室長）、	
【年度実績と成果】		
- 発掘調査交流 韓国国立文化財研究所との合意に基づく発掘調査交流 当研究所研究員の派遣：1人（5月15日～6月30日） → 韓国・慶州において発掘調査等に参加 なお韓国研究者の招聘については、元年度は中止となった。 - 日韓共同研究 韓国国立文化財研究所との合意に基づく共同研究事業の実施 日韓共に5チームが共同研究に参加 韓国側：計15人を受け入れ。各チーム1週間程度。 日本側：計13人を派遣。各チーム1週間程度。 なお、2年度には共同研究の成果を取りまとめ、『日韓文化財論集Ⅳ』を刊行する予定。		
		
		韓国における発掘調査交流の様子



韓国における発掘調査交流の様子

年度計画評価		B			
【評定理由】 下記の各観点から評価を行った。①適時性においては、年度計画に沿って計画的・効率的に共同研究を実施することができた。②独創性においては、考古学、文献史学、名勝などの広範な分野にわたる両研究所の特性を活かして共同研究を行った。③発展性においては、日韓で学術的課題を共有し、研究することで今後の学術的發展に寄与することができた。⑤継続性においては、本事業が平成 18 年度から継続しており、今後も共同研究を持続していくことを確認できた。					
観点	①適時性	②独創性	③発展性	⑤継続性	
定性評価	B	B	B	B	
【目標値】		【実績値・参考値】 (参考値) ・論文等数 2 件 (ア、イ)			定量評価
					—
ア：廣瀬寛・高田祐一「古代朝鮮半島の矢穴技法」『奈良文化財研究所紀要』2019、6 月 イ：清野陽一「日韓発掘交流に参加して」『奈文研ニュース』No. 74、9 月					

中期計画評価	B
中期計画記載事項	古代日本の都城の解明等を図るため、平城地区では平城宮跡東院地区と東大寺塔院地区の調査研究を進め、飛鳥・藤原地区では藤原宮跡大極殿院地区と飛鳥地域の寺院遺跡の調査研究を進める。
評定理由及び今後の見通し	古代日本の都城の解明を図るため、韓国国立文化財研究所との合意のもと、共同で調査研究を進めているが、発掘調査を介した人的交流も行うことによって、学術成果のみならず互いの信頼関係を蓄積している。2年度以降も研究事業を継続的に実施し、5年ごとに研究成果を論集というかたちで結実させ、長期的な発展を視野に含めた上で、本事業を展開していきたい。

中期計画の項目	2-(1)-③-3)	新たな知見の開拓につながる基礎的・探求的な調査研究
年度計画の項目	2-(1)-③-3)	③記念物、文化的景観、埋蔵文化財に関する調査研究 3)重要文化的景観等の保存・活用に関する調査研究 文化的景観の調査及び保護に関する情報収集、調査研究、成果の公表を行う。また、文化的景観の保存・活用に関する研究集会を開催するとともに、前年度に開催した研究集会の成果をまとめ、報告書を刊行する。
プロジェクト名称	文化的景観及びその保存・活用に関する調査研究	
文化遺産部	【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】 ○中島義晴（景観研究室長）、恵谷浩子（景観研究室研究員）	

【年度実績と成果】

- 基礎的・体系的研究
- ・文化的景観と民俗学との関係をテーマとする文化的景観研究集会（第11回）を企画し、それに向けた情報収集と、民俗学研究者との意見交換・内容検討を行った。（研究集会開催を2年3月に予定、準備したが、新型コロナウイルス感染拡大防止のために2年度に延期した。）
- ・30年度に開催した文化的景観研究集会「風景の足跡—考古学からの文化的景観再考」の報告書を刊行した（刊行物ウ）。
- 文化的景観保護に関する現地調査・研究
- ・当研究所ウェブサイトにおいて公開している重要文化的景観選定地区の情報について、「アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観」（北海道沙流郡平取町）等の最新情報を追加した。
- ・京都市、宇治市、智頭町等をフィールドに、市の担当部局への協力を通じて文化的景観の価値や継承等に関する検討を行った。



研究集会報告書刊行



重文景の情報収集・公開

年度計画評価		B				
【評定理由】 ①適時性においては、考古学が文化的景観の理解に重要な役割を果たした最新事例を検討しその成果を報告書として刊行した。②独創性においては、文化的景観の分野で従来一部でしか取りあげられてこなかった民俗学の手法に文化的景観の観点から着目したことにより、分野を横断して現状や課題を把握することができた。③発展性においては、研究集会等で文化的景観保護に関する多分野の事例を収集、検討できたことにより、今後のさらなる発展を期待できる。④継続性においては、文化的景観に関する研究集会の成果を毎年公表し、また、重要文化的景観選定の情報を更新した。						
観点	①適時性	②独創性	③発展性	④継続性		
定性評価	B	B	B	B		
【目標値】		【実績値・参考値】 (参考値) ・論文等数 6 件（ア） ・研究発表等数 8 件（イ） ・報告書等の刊行数 1 件（ウ）				定量評価
						—
ア 恵谷浩子「『文化的景観』の概念形成と制度運用の充実に資する貢献」『造園学論集 21 』5 月 ほか 5 件 イ 恵谷浩子「文化的景観からみた京の輪郭」5 月、ほか 7 件 ウ 奈文研『風景の足跡—考古学からの文化的景観再考 第 10 回文化的景観研究集会報告書』2 年 3 月						

中期計画評価	B	
中期計画記載事項	文化的景観の保存・活用の促進等を図るため、重要文化的景観に関する情報を収集・整理し、成果を公開する。あわせて、複数の事例研究により文化的景観の調査手法の体系化を行う。	
評定理由及び今後の見通し	不測の事態による研究集会の開催延期以外は、30年度研究集会の報告書刊行や現地調査の実施等により、当初の計画通り研究を遂行できた上、文化的景観の概念等の体系化の検討を深め、ウェブサイトの更新をして情報を継続的に公開し、保護行政・学術研究への貢献を図った。現地調査・研究では、保存計画や整備・活用計画の策定について検討を深められたことは評価できる。 2年度以降は、文化的景観の保存計画や整備活用事例の基礎的な情報収集、また、個別の事例・課題に対する検討を行い、研究集会の開催、成果の公表等をしていく。	

中期計画の項目	2-(1)-③-4)	新たな知見の開拓につながる基礎的・探求的な調査研究
年度計画の項目	2-(1)-③-4)-7	③記念物、文化的景観、埋蔵文化財に関する調査研究 4) 全国の埋蔵文化財に関する基盤的な調査研究 我が国の埋蔵文化財及びその保存・活用に関し、以下の調査研究を行う。 ア 全国の遺跡のうち災害痕跡のみられる遺跡や、官衙・古代寺院を中心とした資料収集及び分析に有効な指標や手法についての研究を進め、その成果をデータベース化して順次公開する。
プロジェクト名称	全国の埋蔵文化財に関する基盤的な調査研究	
埋蔵文化財センター 企画調整部 都城発掘調査部	【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】 ○金田明大（遺跡・調査技術研究室長）、馬場基（都城発掘調査部史料研究室長）、小田裕樹（都城発掘調査部考古第二研究室研究員）、村田泰輔（遺跡・調査技術研究室研究員）ほか	
【年度実績と成果】		
・30年度開催した第21回古代官衙・集落研究集会の報告書、『地方官衙政庁域の変遷と特質』（奈良文化財研究所研究報告第20冊、アイ）を編集・刊行した。 ・都城（藤原・平城・長岡・平安）に関する報告書のめくり作業を行い、甕据付建物に関する遺構を収集・整理した。 ・新たに刊行された官衙関係遺跡・寺院遺跡についての資料をデータベース化し、新出資料も追加して一般公開した。 ・奈良県の井戸遺構に関する資料を収集・整理しそれらをデータベース化した。 ・皇朝十二銭に関するデータベースを作成し、奈良県の資料収集・整理を行いデータベース化した。 ・か帯に関する資料収集を行った。		



研究報告資料等



井戸 DB 入力画面



研究報告資料等



井戸 DB 入力画面

年度計画評価		B				
【評定理由】 ①適時性において、文化財保護行政で需要の高い官衙遺跡の基礎情報を提供し、その研究と保護の施策を講じる上で寄与している。②独創性において、全国を網羅し、多彩なデータベース項目を備えることで多様な分析が可能であり、他に類を見ない。③発展性において、公開データ地域・件数、データ種類を広げている。④効率性において、官衙・集落遺跡の研究は、膨大な量のデータを比較検討する必要があり、それを効率よく検索・集計することに大きく寄与している。⑤継続性においては、継続的な情報の追加と改定によりデータベースの充実化を図り、報告書等により公開している。以上の評価点からみて、所定の目標を十分に達成していると認められ、Bと評価する。						
観点	①適時性	②独創性	③発展性	④効率性	⑤継続性	
定性評価	B	B	B	B	A	
【目標値】		【実績値・参考値】 (実績値) データベース入力補訂件数；合計 6,729 件 官衙関係遺跡データベース（遺跡数 199 件/文献 1188 件/建物データ 546 件/画像データ 760 件）、古代寺院遺跡データベース（遺跡数 8 件/文献 445 件/建物データ 104 件/画像データ 152 件）、古代井戸データベース（遺跡数 69 件/文献 427 件/井戸データ 547 件）、皇朝十二銭データベース（遺跡数 204 件/文献 964 件/銭データ 510 件）、か帯データベース（仮称）（遺跡数 191 件/文献 415 件） ・公開データ数：合計 104,677 件、報告書件数：1 件（ア） (参考値) 研究集会当日資料集：1 件(イ)				定量評価
		—				
ア小田裕樹ほか編『官衙・集落と大甕』報告編、奈良文化財研究所研究報告第 23 冊、12 月 13 日 イ第 23 回古代官衙・集落研究会『灯明皿と官衙・集落・寺院』当日資料、12 月						

中期計画評価	B
中期計画記載事項	4) 全国の埋蔵文化財に関する基盤的な調査研究 遺物及び遺構の解明とその保存・活用の促進等を図るため、官衙・集落遺跡、古代瓦等に関し全国的な情報収集及び連携に基づく調査研究を実施し、成果を公開する。
評定理由及び今後の見通し	研究は計画通り順調に進捗した。継続的な情報の蓄積が着実に図られており、我が国の古代官衙・集落研究に寄与するところが大きい。当研究所が推進する「全国遺跡報告総覧」を効果的に活用する上でも、特に需要の多い官衙・集落・井戸について、その効率的な分析・研究を支える本データベースは重要である。今後も継続して情報の収集と公開活用を推進したい。

中期計画の項目	(1)-③-4)	新たな知見の開拓につながる基礎的・探求的な調査研究
年度計画の項目	2-(1)-③-4)-イ	③記念物、文化的景観、埋蔵文化財に関する調査研究 4) 全国の埋蔵文化財に関する基盤的な調査研究 我が国の埋蔵文化財及びその保存・活用に関し、以下の調査研究を行う。 イ 古代官衙・集落遺跡に関する研究集会を開催し報告書を刊行する。古代瓦に関する研究集会、古代土器に関する研究集会を開催する。
プロジェクト名称	古代官衙・集落遺跡に関する研究集会の開催及び報告書刊行	
都城発掘調査部	【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】 ○玉田芳英（都城発掘調査部長）、渡辺晃宏（同副部長）、馬場基（同史料研究室長）、林正憲（同主任研究員）、小田裕樹・大澤正吾（同考古第二研究室研究員）、清野陽一（同考古第三研究室研究員）	

【年度実績と成果】

(1) 第 23 回古代官衙・集落研究集会「灯明皿と官衙・集落・寺院」（12 月 13～14 日、於：平城宮跡資料館講堂）を開催。研究報告は神野恵「古代都城の灯火器」、渡邊誠「国府・寺院における灯明皿」、富永樹之「古代相模国における出土遺跡から見た灯明皿」、桑田訓也「文献からみた灯明皿」、梶原勝「近世灯明皿の変遷から見る生活様式の変化」の計 6 本。報告後会場からの質問や意見を交えつつ、尾野善裕の司会により報告者を中心とした討論を行った。また研究集会に際しては、報告資料集（イ）を編集・刊行し、参加者等に配布した。

(2) 『第 22 回古代官衙・集落研究会報告書 官衙・集落と大甕』（奈良文化財研究所研究報告 23 冊）（ア）の刊行。

30 年度開催した第 22 回研究集会の報告書を刊行し、研究成果の公開を行った。



研究集会の様子

年度計画評価		B			
【評定理由】					
以下の各観点から評価を行った。①適時性においては、古代官衙・集落遺跡の調査・研究推進における重要かつ適切な課題を設定し、第23回研究集会を開催し、30年度に開催した第22回研究集会の成果を、遅滞なく研究報告書として刊行し、広く公開した。②独創性においては、従来注目されていなかった官衙・集落・寺院遺跡出土灯明皿に焦点を絞り、各地域・遺跡での出土様相や痕跡パターンの抽出作業を通じて、灯明皿の特性および歴史的意義づけを論じることができた。③発展性においては、灯明皿という新規の視点の提示と共有によって、今後多くの地域・遺跡での分析が積み上げられ、豊かな成果を得ることができ期待される。④効率性においては従前からの開催・編集を踏襲しつつ、適宜改良を加えて作業の軽減を図った。⑤継続性においては、当研究所の事業として、継続的に研究集会を開催し、成果を刊行することで、多くの参加者を得てかつ研究の相互連携を深めることができた。以上より、Bと評価した。					
観点	①適時性	②独創性	③発展性	④効率性	⑤継続性
定性評価	B	A	B	B	B
【目標値】		【実績値・参考値】			定量評価
		(参考値) ・論文等数・・・・・・6件 ・研究発表等数・・・・5件 ・報告書等の刊行数・・2件 ・研究集会参加者115人。アンケート・回収105人(回収率91%) 大変有意義65人、有意義37人、普通3人、あまり有意義ではなかった0人、有意義ではなかった0人。			—
ア『第22回古代官衙・集落研究会報告書 官衙・集落と大甕』（奈良文化財研究所研究報告23）12月 イ『第23回古代官衙・集落研究集会 灯明皿と官衙・集落・寺院 研究報告資料』12月					

中期計画評価	B
中期計画記載事項	遺物及び遺構の解明とその保存・活用の促進等を図るため、官衙・集落遺跡、古代瓦等に関し全国的な情報収集及び連携に基づく調査研究を実施し、成果を公開する。
評定理由及び今後の見通し	当初計画通り研究集会を実施し、報告書を刊行することができた。この研究集会報告・討論を通じて、古代国家形成の分析や古代都城研究に資する研究成果を得ると同時に、全国の文化財担当職員等との調査・研究情報の交換を通じ、研究の質的向上に資した。また、研究報告書の刊行によって研究成果を公表し、国民共有の財産となった。 本研究集会及び報告書は、古代国家形成・古代都城研究に有益で、また全国の地方自治体の埋蔵文化財担当職員等の参加者からの期待も大きい。今後も継続的に事業を推進する必要がある、適切なテーマ設定による質の高い研究集会の開催を進めていきたい。以上より、Bと判定した。

中期計画の項目	(1)－③－4)	新たな知見の開拓につながる基礎的・探求的な調査研究
年度計画の項目	2-(1)-③-4)-イ	③記念物、文化的景観、埋蔵文化財に関する調査研究 4) 全国の埋蔵文化財に関する基盤的な調査研究 我が国の埋蔵文化財及びその保存・活用に関し、以下の調査研究を行う。 イ 古代官衙・集落遺跡に関する研究集会を開催し報告書を刊行する。古代瓦に関する研究集会、古代土器に関する研究集会を開催する。
プロジェクト名称	古代瓦に関する研究集会の実施、報告書の刊行	
都城発掘調査部 (平城)	【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】 ○清野孝之（都城発掘調査部考古第三研究室長）、今井晃樹（同上席研究員）・林正憲・岩戸晶子（同主任研究員）、石田由起子・清野陽一・岩永玲（同考古第三研究室研究員）、道上祥武（同アソシエイトフェロー）	
【年度実績と成果】		
(1) 第20回シンポジウム 「鷗尾・鬼瓦の展開Ⅰ－鷗尾－」（2年2月1～4日、於：平城宮跡資料館講堂）を開催。 研究発表は、道上祥武「奈良の鷗尾」、熊谷舞子「京都・滋賀の鷗尾」、丸山香代「大阪・和歌山の鷗尾」、垣内拓郎「兵庫の鷗尾」、香川将慶「山陽・四国地方の鷗尾」、武田寛生「東海地方の鷗尾」、久保穰二郎「山陰地方の鷗尾」、比嘉えりか「九州地方の鷗尾」、洪パルグム「韓国の鷗尾」の計9本。紙上発表は、佐川正敏「東北地方の鷗尾」、出浦 崇「関東地方の鷗尾」、熊谷葉月「北陸地方の鷗尾」、三好清超「中部地方の鷗尾」の計4本。大会2日目に報告者を中心とした総合討論会を開催し、会場からの質問や意見を交えつつ、討論を行った。シンポジウムに際しては、発表要旨集（ア）を編集・刊行し、参加者等に配布した。 (2) 『古代瓦研究Ⅸ 一本づくり・一枚づくりの展開 東日本編』（イ）の刊行。 第18回シンポジウムの報告書を刊行し、研究成果の公開を行った。		



研究会の様子



研究会の様子

年度計画評価		B			
【評定理由】 下記各観点から評価を行った。①適時性において、当初の予定通り第20回シンポジウムを開催した。あわせて29年度に開催した第18回シンポジウムの成果を報告書として刊行した。②独創性については、これまでに全国でも類例のない鷗尾を対象としたシンポジウムを開催し、その製作技法や全国での分布及び編年、系譜関係について多くの新知見を得ることができた。③発展性においては、今後、全国での新資料の認識を深めるとともに、東アジアにおける鷗尾の起源や伝播に関する研究に資する成果を提供することができた。④効率性においては、全国の資料を一所で集中的に検討することにより、各地の鷗尾の相違点と共通性を確認し議論することができた。⑤継続性においては、2年度に鬼瓦について全国規模で検討する予定である。以上から、本事業を計画通り着実に実施したといえる。					
観点	①適時性	②独創性	③発展性	④効率性	⑤継続性
定性評価	B	B	B	B	B
【目標値】		【実績値・参考値】			定量評価
		・論文等数 13件(うち当研究所1件) ・研究発表等数 9件(うち当研究所1件) ・報告書等の刊行数 2件(アイ) ・研究集会参加者151人。アンケート・回収104人(回収率69%)			—
ア「第20回シンポジウム 鷗尾・鬼瓦の展開Ⅰ ―鷗尾―」2年2月 イ「古代瓦研究Ⅸ 一本づくり・一枚づくりの展開 東日本編」2年2月					

中期計画評価	B
中期計画記載事項	遺物及び遺構の解明とその保存・活用の促進等を図るため、官衙・集落遺跡、古代瓦等に関し全国的な情報収集及び連携に基づく調査研究を実施し、成果を公開する。
評定理由及び今後の見通し	当初計画通り研究会を開催し、報告書を刊行することができた。これまで十分な検討がなされてきていない鷗尾について多くの重要な知見を得ることができ、また議論を通じて共通認識を高めることができたことは、今後の調査・研究に大きな意義を持つ。さらに2年度に予定している鬼瓦に関する総合的研究にもつなぐことができた点も大きな成果である。以上より、順調に進んでいると考えられ、Bと判定した。

中期計画の項目	2-(1)-③-5)	新たな知見の開拓につながる基礎的・探求的な調査研究
年度計画の項目	2-(1)-③-5)	③記念物、文化的景観、埋蔵文化財に関する調査研究 5)水中文化遺産に関する調査研究 我が国の埋蔵文化財及びその保存・活用に関し、我が国の水中文化遺産の保存と活用の体制を構築するため、水中文化遺産の調査法、保存並びに活用に関する調査研究を行う。
プロジェクト名称	水中文化遺産に関する調査研究	
埋蔵文化財センター 都城発掘調査部	【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】 ○高妻洋成（埋蔵文化財センター長）、清野孝之（考古第三研究室）、金田明大（遺跡・調査技術研究室長）、林正憲（都城発掘調査部主任研究員）	
【年度実績と成果】		
・ 鷹島海底遺跡において発見された元寇沈船を良好に現地保存するため、砂嚢と酸素不透過性シートを用いた埋め戻しが実施されている。この方法による埋め戻しの有効性を検証するため、埋め戻しが実施されている海底遺跡現地において、温度と溶存酸素をモニタリングするとともに、銅板、鉄板および木材の試験片を同時に埋設し、海底暴露試験を実施した。 ・ 松浦市鷹島町において開催された水中考古学セミナーで、海底遺跡出土遺物の保存処理について講演を行った。 ・ 博物館において展示されていた海底遺跡より出土した銅製品に腐食生成物が発生したことを受け、腐食生成物の材質調査を行い、有効な保存処理法の検討を実施した。		
		 海底テストピースの設置

年度計画評価		B			
【評定理由】 下記各観点から評価を行った。①適時性：海底遺跡における金属製遺物及び木製遺物等の現地保存に関する未解決の課題に取り組んだ。②独創性：元寇沈船の海底での劣化を抑制するための現地保存法として、砂嚢と酸素不透過性シートを用いた新たな手法を検証した。③発展性：海底遺跡での遺物の現地保存法を確立することにより、潜在的に存在している海底遺跡の良好な保存につなげることが期待できる。④効率性：これまで海水中の溶存酸素の長期にわたる連続測定は困難であったが新たな測定法を導入したことにより、効率よく溶存酸素のデータの蓄積が可能となった。⑤継続性：海底遺跡での埋め戻しによる現地保存法を開発するためには、長期にわたるモニタリングが必要である。潜水調査を行うことができる研究員が研究を遂行することで継続性を担保した。					
観点	①適時性	②独創性	③発展性	④効率性	⑤継続性
定性評価	B	B	B	B	B
【目標値】	【実績値・参考値】 論文等数：2件（ア） 研究発表等数：6件（イ）				定量評価
					—
ア M. Yanagida <i>et al</i> , “Effect of Reburial Conditions on the Corrosion of Marine Iron Artifacts”, Proceedings of the interim meeting of the ICOM-CC Metal working group (9月) イ 高妻洋成「水中遺跡出土遺物の保存処理法―鷹島海底遺跡出土遺物を中心に―」水中考古学セミナー（6月）					

中期計画評価	B	
中期計画記載事項	国内の水中文化遺産の調査に取り組むとともに、主に海外の水中文化遺産に関する調査研究及び保存活用の事例を調査し、今後の取組に資する。	
評定理由及び今後の見通し	水中文化遺産の保存と活用を図るためには、水中文化遺産の調査法の開発とともに水中文化遺産の現地保存法並びに出土遺物の保存処理法を開発する必要がある。多くの課題がある中、鷹島海底遺跡で発見された元寇沈船の現地保存に取り組み、有効な方法を提示することができた。海底遺跡での作業ということもあり、綿密な計画をたてて実施することで、新たな現地保存法の効果を検証することができるようになったことから、Bと評価するものである。今後は、遺跡の把握法の開発、遺物の保存処理法の開発等に取り組んでいく予定である。	